

序

夫演劇之爲技也。演喜怒哀樂悲憤慷慨之情於目前。不知不識有教誨勸誘人心矣。今我國所演技者。不然。惟婦人小子之所快樂耳。是務豈可謂誤之甚者。輒近雖有演劇改良之舉。未以能保其全是予曾所不堪痛嘆焉。此編者以西洋演劇之意匠爲體。撰其狀爲用。以豔筆綴其意。固僅々一小冊子也。雖然苟播此卷者。至于西洋演劇之場。如見親其活劇於

目前。發喜怒哀樂悲憤慷慨之情。不知不識。使教誨勸誘人心。必矣。是我國如所演技。婦人小子之所快樂耳。是務者。豈惟霄壤哉。余有感于此。則書之以爲序。

竹外居士

塞士比亞氏シウピア小傳シウピア

泰西にて古今獨歩の戯作者と持囃され。芳名は幾百年の永き星霜を経て。今日吾東洋まで覆郁として。香り來れる英吉利國の維廉塞士比亞氏の事歴を探る。氏は今を去るあと三百二十四年。即ち西曆一千五百六十四年第四月。窩爾維克州斯士拉度不スラド留土スラドの顯利街グレイに在る父の家グレイに於て出生る。抑もその頃ほひおわりて。市街の住民ども僅ち千五百人計りお過ぎず。家屋は皆木材泥土を以て造りしものなり。就中衆人の目も付く建築物としては。たゞ顯利街グレイに在る寺院と希爾士保館との二ツを以て數ふるのみ。蓋しこの館は公共の用も供せるものにて。市街此事を商議する時市民の集會せし所なり。又その時として。茲にて蹈舞を催したるものとあり。と云ふ。

氏が父慈安塞士比亞氏シウピアの斯士拉度不スラド留土スラドに於ても屈指の人物

むして。その初の手套の製造を以て本業となし。傍ら少しばかりの土地を所有して。それを耕作し。富たると云ふものあらねど。富たる人は彌増して。いと心安き月日を送りしが。市民の中を氏に望を属する者夥しく。遂に市内の取締役とまで敬まわれ。後ち地主の娘馬利亞典と云へる女を娶りて。著るべき土地を貰ひしうべ。驟り富貴の身となり。琴瑟和合暮せし中。夫婦の間。又数人の子を設け。より維廉塞士比亞氏は其第三子として。稍々長ずるに及び。市内の或る學校に入學し。この處より。盤雪の功を積まけるが。固と一聞百知の才ある少年故。少しが程より上達し。末頼もしき學生と多なりぬ。

塞士比亞氏年十四此頃。ほひより。父の次第に家財を失なひ。一千五百八十七年頃より。負債の禍に繋かれ。首を回らぬ境に沈み。満ちれば缺くると云ひながら。進退こゝと谷まりて。更に詮術

中々。氏も。學窓より身神を委ぬるゑどのならずして。止むなく父の跡に歸り。家業を扶助することゝなりぬ。其後十八歳のとき。安藤波佐威と云へる娘を娶り。四五年の間は尙得。斯土拉度不留土に住ひまが。一千五百八十六七十年頃。方一幸運に遇ひもやせん。と。雲を掴みよ心を決し。妻を携さへ住馴れ。志。斯土拉度不留土を後。眺。世。又。芳。花。の。倫敦。さ。ま。て。ぞ。上。り。たり。

氏は倫敦に著せしより。思ふ由やわりけん。通傳を求めて。俳優となり。傍ら新劇書并びに古院本の著述に從事せしが。固と謹慎にして。艱苦に堪ゆるの性質なれば。幾程もなくして家を起し。遂に伯拉克不來座の株主の一人と數へられ。後。又。た。眞。半。座。の。株。を。過半所有し。いと富貴の身はなりぬ。

一千五百九十三年甫。起て。詩を著し。せしが。これ誠と氏は學力を弘。世。人。も。知。ら。し。た。た。る。もの。と。云。ふ。べ。し。當。時。氏。の。散。弗。榮。晉。興

若侯の愛顧を受け。萬保護せられしりは。塞士比亞家此幸の一層の
 度を進めたり
 其後數年よして文學上の名譽の。氏の財産と共に彌高き度よ昇
 りしかば。氏も脱塵の心を起し。遂よ一千六百十年の頃。故郷斯士
 拉度不留土よ。夥多の不動産を買ひ求め。妻子を引きて。よ退
 隠せり

蓋し何年何月。劇場を退きて。故郷に歸りしや。これを精密
 よ知るよし能はず

氏は一旦世寰の黃塞よ染りたる。衣服を脱ひて。故園なる斯士拉
 度不留土よ歸りて。よりハ。春ハ花を深山よ訪ひ。秋來れば。月と清
 洲に酌み。取て再び世事を顧みず。妻を誘さへ。子よ戯むれ。いと樂
 じき。月日を送りしが。命數限ありて。遂よ一千六百十六年四月二
 十三日。永眠不起の人となり。斯士拉度不留土なる。或る寺院よ埋

葬られしとなん

附言氏は羅甸希臘の古語をも學び。其倫敦よ滞在中。佛語并に

伊太利語も稍々學び。まものゝ如し

塞士比亞氏の著述せしもの。三十六種の院本と夥多ハ
 詩書ありて。本篇哥畧拉那の劇書ハ。一千六百十年頃ほひ
 よ書き綴りしと此と思へる

譯者識

凡例

一 演劇改良の補助ともならんかど譯者との春頃より英國の戯作者塞士比亞氏の筆に係れる哥零拉那と云へる院本の翻譯に着手せしが此頃漸く出來上りしを以てこれを自由の筆豪傑一世鏡と題し文に拙なきをも顧みずして出版せり

一 哥零拉那と云へる人は耶穌紀元四百九十餘年即ち我國に在りて懿徳天皇の頃得ひ羅馬國に於て起りて一豪傑なり

一 當時羅馬は如何なる有様なりしその容子を知らずして突然本文を讀む時は闇夜燈をくして歩む異ならず故に予は讀者の欠伸を厭はず今本篇に起る出來事より少きを以前の羅馬國上下の有様を略記し以て暗夜の燈に代んと欲す抑も羅馬國は當時貴族平民の二種族に別れ平民は貴族の暴威を怨り常々これを削除せんと欲すれども貴族の權力熾に

してこれを撲滅する能はず貴族は平民の怯弱を乘じ只管己等の利益此みを計り更々平民に利害得失を顧みず益々壓し彌々制し再び首を擡ぐこと能はざらしむ是に於ては兩族の間紛擾斷間なく貴族は政務を捨て、平民を苦むることに従事し平民鐵鋤を擲て貴族を亡さんまると焦慮せり

當時羅馬は達爾克因と云へる一豪傑ありて壓制暴虐を擅し自から羅馬に主たらんと企てしかば貴族平民に差別なき互に一致して兵を起し終にこれを平けたり蓋し其の役の勝利の全を平民の力に依れるものなれば平民等ハ已等が國家に尽したる功勞を免じを幾分か自由を享受し貴族の壓制を亦た減するなるべしと確信し竊かに喜び居たるも拘らず敵を刀鎗倉庫に藏まる此時に至りては以前より一層の重き壓制吾頭上と落ち來りしかば平民の憤懣鬱ふるは物なく

將又蜂起せんとする折しも隣國窩爾士人羅馬の領内に侵入し奪掠殺戮を縱よし内外共々擾亂せしを以て貴族もこれを治むるに由なく遂は自由を許その約束を以て平民も窩爾士の兵を拒がしむ平民もこれを信じ貴族に向けんとしたる録先を窩爾士兵も取直し親討たるも願みず子斃るれこれ踏越へ命を惜まらず勇闘し首尾能凱旋したる甲斐もなく當時貴族より成立ちて政務を執れる識事官は人民も約束したる條件を拒きて實行せざりしがば平民党は前ふり己等も失望させ後ふり己等を欺きたりとして遂は入紐士不慮麥西齊紐士、威流麥と云へる二人の平民を撰きて大將とあし叛旗を翻へして羅馬も程近き丘の上は陣を張り新都府を設置せんことを企てたり蓋しあるの時羅馬も米穀欠乏し貧民は窮苦言語も絶ゆる計りなりしが幸ひ西齊里比王米穀を羅馬も輸

入せしむる議事官輩のこれを低價めて貧民も願與せんとなしたりしは馬爾士亞と云へる貴族即ち哥畧拉那の爲たよこれを拒まれ遂は癡案となしたり是も於て平民等は馬爾士亞を惡むこと甚いたしく遂は本文此說話を起すはなりぬ

譯者一るす

役名

- 一 改亞斯馬爾士亞 (後ち哥畧拉那)
- 一 古美紐士 (羅馬執政官よて窩爾西と戦争此時羅馬の提督)
- 一 茅度拉爾周 (議事官よて窩爾西と戦争の時一方の大將)
- 一 麥尼紐士亞克立巴 (議事官にて哥畧拉那の朋友)
- 一 西齊紐士威流多 (平民より撰まれし民長)
- 一 入紐士不盧多 (右同斷)
- 一 少馬爾西亞 (哥畧拉那の子)
- 一 達爾拉士換啡丟士 (窩爾西の大將)
- 一 換啡丟士の副將
- 一 換啡丟士の郎等
- 一 安地亞府の市民
- 一 窩爾士此番兵

場所

- 一 窩流美亞 (哥畧拉那の母)
- 一 窩留路利 (哥畧拉那の妻)
- 一 華列利 (貴女よして窩留路利此朋友)
- 一 窩留路利 (隨行せる貴女輩)
- 一 羅馬並ち窩爾西の議事官。貴族。副民長。兵士。市民。使節。侍女。從者。奴僕
- 一 羅馬並ち其近郊
- 一 羅馬の西北數里に在る哥畧於利府
- 一 窩爾西北都安地亞

○序 幕

羅馬府の平民一揆の場
哥畧於利府會議場此場
馬爾士亞館の場

○二幕目

哥畧於利府外の場
哥畧於利府門の場
哥畧於利府内の場
古美紐士陣營の場
哥畧於利府門外の場
兩將決闘此場
古美紐士陣營の場

○三幕目

羅馬府へ凱陣の場
加比多カピトの場

○四幕目

哥畧拉那館此場
公會場の場
羅馬府門前哥畧拉那分袖此場

○五幕目

安地亞府アンヂヤ埃啡丟士邸前の場
埃啡丟士館の場
羅馬府公會場の場

○六幕目

羅馬府議事院の場
羅馬此近郊窩爾西陣營の場

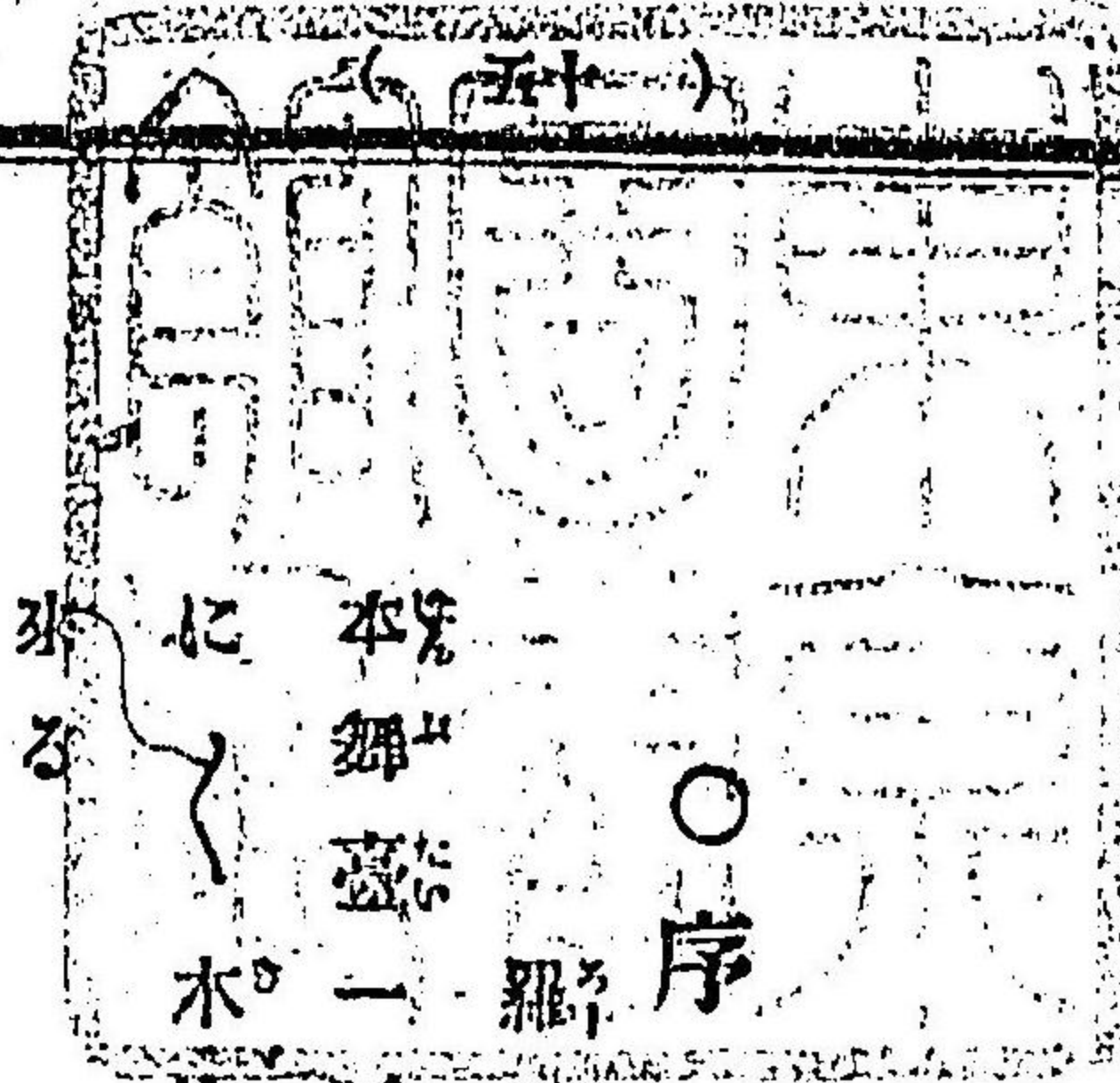
哥略拉那陣屋の場

○七幕目大詰

哥略於利府公會場の場

自由の愛の継
豪傑一世鏡

英國 塞士比亞原著
日本 板倉與太郎 譯述
全 小野友次郎 校閱



○序幕

羅馬府此平民一揆の場
本舞臺一面羅馬市街の体。こゝみ峰起せる平民の一羣手に
に、木片、棒刀、鎗などを携さへ。騒々しく花道より出て
来る

○皆此衆暫らく足を留めて、己の言ふると聴かつしやれ
○(二回)なんだく。早く話あつしやれ
○言ふまでもなく。お前方は餓て死ぬるよりは。潔よく命投捨て

よふと。覺悟して御坐らふナ
(一同)オ、く 覺悟の上どもく

○お前方を。さふ思ひつしやるう知らんが。改亞斯馬爾士亞と云ふ奴の已等共又取て。一番悪い敵で御坐るぞ

(一同)そふとをく

○それじやに依る。彼奴が居らずバ已等達も。少者は樂み食へると云ふものじや。手始お彼奴を殺さふじやないう

(一同)それは言はずと知れて居るものとじや。無益なことを聽くよ

及ぬ。一足でも早ふ行ふく

□イヤく ぞふとをふ一言。何の人又話してとらいたいのじ

やナア

○ア皆の衆よく考へて見さゆまやれ。已等達の貧乏は。今が今知れたも此てもなま。また貴族の倉庫の中よ。米や金の溜りたの

も。昨日や今日のことでもあいうら。少しは已等此苦を助けても呉れさふなものとじやないか。今ま貴族此人々が湯水によふ遣ひ捨てる。米や金を已等達よ少しづつ。でも呉れて見ろ。喜ぶまいものかソレハモフ 已等達よ取ての活た神さまじや。とあるがドッシアく 貴族の心持はさふでなく。已等一同の平民を魂をなく飲食もせぬ。石や瓦のよふと思ひ。己の懐を肥やそよとばあり目論見を。平民共の餓死するよは目も注けず。我儘氣儘よ世を送り。花見遊山お日を暮らし。ソレハモフ 鬼またよふな心休じや。それを思へ。己等達よ。立ても坐ても居られんわい。貴族がどのよふよ強かるふが。天統様が御存じや。已等達此命の兎も角も。親や妻子が可愛なら。あゝで己等達が奮發せぬならぬわい。ろふじやないか皆の衆

(一同)さふどもく。さあく 早ふノ

□ マア待さつしやれ。皆の衆は重し馬爾士亞を目當め進まつしやるか

○ それの言はずと知れたるとじや

× 已等違ぐ目指す貴族此ろの中で

⊕ 馬爾士亞は一番恨のゐる奴じや

◎ 安穩よ置て

(二同) たまるを此るく

□ それはモフばのことじやが。しるしお前方をよく思ふて見さつしやれ。馬爾士亞の國の爲たよ。たいした働をしたてではない

○ ナルホドろれはモフ已等とても知らず居る此じやないが

あれの心あら國の爲を思ふて。働さわけではないのじや

□ お前方の一圖又悪いと思ふ故。さふ言つしやるも無理のない

が。成る丈け善も此の善い。悪ものゝ悪いと。ろの見分を付けて進

まぬど。天統さまも濟むまいじやない

○ ナニ心よしのお前達よは。さふ結構よ思われても。馬爾士亞が働たの。一つは母親の機嫌をとり。また一何よは已も威勢を付けん爲め。國を思ふ心よどは。罌粒ほどもないことじや

□ 馬爾士亞の決しを我慾な人でない。それを矢鱈又悪さふ言ふの。お前方の邪根性と云ふものじや

○ コレく馬鹿を言ふにも。法圖があるといや。馬爾士亞の爲たことに。何のマア宜いことがあるものか。最前うら堪らへて居れば得意顔。ツキコベくど大悪人の最負三味。馬爾士亞の悪いことが聞きたいなら。後にて緩りと聞せを進せ。馬爾士亞の悪いまどなら。車に積んで捨てる程あるわい。聞て仰天せぬよふよ

氣付でも買て待を居らつしやれ

(二同) サアく早ふ行ふく

加比多城如
塞の如
きと
まを
施式
なを
行ふ
処

ト二足三足前へ進む。おのとき遙かよ聞は聲聴也。群衆は再び立止り

○皆の衆の聲を聞かつしやれ。大方河向が騒ぎ出したのじや巴等達はなんぞ。あゝ又愚圖くして居たのであらふ早ふ加比多又進まふじやないり

(二同) サア く 早ふ く

ト前へ進みあける。○印手を上げておれをどいめ

○ コレ く 皆の衆静かよし。向を見さつ志やれ

□ オ、常々われ等を最負よしして下される。麥尼紐士、亞克立巴さ

まがおいでたぞ

(二同) ナニ 麥尼紐士様じやと

ト云ふ処へ上手より談事官麥尼紐士一人の僕を連れて出て来る。平民共よろしくある



(麥尼紐士)其方達の市人ならずや。見れば大衆群れ集まり手に
 く得物を携さふる。何故あつてのことなるぞ。シテくまれ
 よりいづれを指さる行く積り。一應この身に告げ知らせよ
 ト沈着を問ひかくる。○印進み出で

○私共がこの様な浅間しいなりよなつとの。今日や昨日の
 どでもない故。職事官此人々を少しの感付て御坐つた又違ひ
 りません。かよふ私共一同が奮發して出りけて来たれも平民
 と云ふ奴は。貧乏な癖又剛情あど。常々云ひつしやる職事官の人
 々よ。今日の手強き平民此腕の力を充分よ目よりけまを心で
 へい

(麥尼紐士)エ、そりやあまり早まり過ぎる。我身で我身を破ると
 云ふ。其方達の今日此振舞。後先能く考がへて。一先こゝを引取
 れよ

○ナニく私共の軀は。今まで貴族の人々が思ぬ存分破らしや
つと故。我身で我身を破らふも。肝心要の破るものがありませ
ん。ぬれぬ先こそ露をも厭へ。破れぬ先こそ軀も守れ。モッこふな
りては。やけのかん八
(麥尼紐士)そふ剛情よ言ひ張れば。詮方もなきあどあから。一應心
を落付て。よつく物の理を考へよ。夫れ吾國の人民が。今日飢餓
よ苦しむは。決して貴族の所爲にあらざ。五兩六風時を得ず。穀物
買らぬ故よして。是れ皆天のなせること。假令餓て死ねば。て
天を怨むの理のあれど。知らぬ貴族よ罪を被せ。鋒を向くるの理
あらんや。民の國此基なれば。其方達の飢餓を救ひ。吾國民を守護
するの。言はずと知れた政治家の主義。されども天のなせる災は。人
力の取り去り得べきものもあらざ。只だ天を仰ひて祈るの外な
し。あゝの道理を聞き分ちて。早くあゝを引拂ひ。家よ歸りて業を

剛之國を乱さず身を全ふし。鼓腹大平の時を待てよ
○イニく滅多よこゝの引かれませぬ。今も貴方様う仰しやる
通り。我と共の難儀をお救ひ下さるのが貴族衆の役目なら。今迄
少しの施てもありさふなものじやに。どふしをくソレ処か貴
族衆の蔽の内よ。はいらぬ程米を積み置きて。我共の餓死する
よの見向をせず。其上よ自分の勝手のよいよふな。嚴しい貸借の
法を作つたり。又た貧乏人を縛はるよふな酷たらしひ。法律を製
らへたり。ソレハモッ生たる甲斐の御坐りませぬ。私共は一大刀
でも。怨を晴らせば成佛かできませすが。坐て居て殺されは。中々
應生出來ません
(麥尼紐士)ア、愚者導ひき難きどかや。我身も殆んど困るわい
トソット思入あつて。色を和ら
イヤナニ其方ども。こゝ有觸れたる話なれど。今身が話まで聞

す故。合點り行たら一時も早く。茲を退散して呉りやれよ
 ○なんの話り知りません。ドヲシテ私共のたのし一ツの
 話位ひで。スゴくを退くもので御坐りませぬ。だが日頃
 御親切なる貴方様故。暫し我慢して聴きませふよ
 (麥尼紐士)されば話さんよ。聞く。昔々手足が胃腑又叛きしと
 き。不平を鳴らし云ひたる様。吾々手足の休む間なく汗水たら
 きて。働らけども。汝胃腑の左にあらす。毎日甘味ひものを喰ひ。寝
 るを起さるを思ふがま。余りと言へば腹立たしひ。大聲揚げ
 て咎めし。胃腑阿々と打笑ひ。手足に向ひて答ぬるよ。實よお
 ん身等の詞の如し。いうにも食物を受取り。それを吾藏し。積
 込めども。こは少志を吾喰ふを此にあらす。日夜少し此腹をなく
 るの食物を消化らして。血管の中へ送り込み。一々おん身等よ
 分け與へ。後又残るの糟ばかり。食ふものにて。更になし。吾在て

うく働らければ。おん身等の命ありをそれ。吾もし働かぬら
 どき。おん身等忽ち死ぬるべし。いと怒り示せし。手足の
 深く愧入て。うの後には決して叛らざりし。とかや。其方共の
 話を。少しの合點しや。たか
 ○それの胃腑のお話。此みよて。何んじや。一向心よ落付きま
 せぬわい
 (麥尼紐士) サレバサ これを管へ。言へ。先づ羅馬は。議事官は。あ
 の働る胃腑にして。不平を鳴らす其方共の。理を弁へざる手足
 又等し。議事官の人々は。其方共の爲め。寝食をも打忘れ。日夜互
 又協議をこらし。害あるもの。取除き。又た幸福となるもの。よ
 くあれを消化らして。其方共と與ふる。寸分違ひぬ。胃腑の働
 若しも。議事官が働ぬ。そのとき。手足が胃腑を失ふ如き。其方
 共此苦は。中々今此比。あらず。それとも。其方共の望み。あら。随分働

が畜へあると。無理なるを中居るので御坐る。よろし御坐る。拙者彼奴等を説篤し。まだ剛情を張るときは。片刀ばしから首を落とす。刀の錆とそるで御坐るふ

ト刀の柄に手をあける。麥尼紐士押止とせ

(麥尼紐士) アイヤ それよは及び巾さぬ。拙者最前より説き聞あせたれば。彼等ももはや合點致し。今にも退散致して御坐るふ。シテ貴殿よは。一方よ起りし暴動の様子を。御存して御坐るか

(馬爾士亞) 某實地目撃致して御坐る

(麥尼紐士) シテ いや退散致して御坐る

(馬爾士亞) 平民共の退散致せしかど。後よ残りし一ツの願

(麥尼紐士) シテ ろの願どの

(馬爾士亞) さればさ。其の願と申すの只事よて候はず。二人の民長と二人の副民長とを平民の中より撰と出せ。貴族と平民との間

に往來し。常よ平民の財産權利を保護せしめ。又た施政よ干渉するを得せしむると此儀なり。某が参りし節には。鎮撫官既よあれを許るし。入紐士不慮多。西齊諾士威流多と云へる二人は平民を民長となし。外に二人を撰みて副民長となし居りし故。某鎮撫官よ向けて不腹を言ひしかども。後の祭よて詮方なく。残念ながら見通し置て御坐る。ア、今日てそら平民の。氣儘氣隨を申立て動をすれば。一揆三昧。貴族は心痛少あからぬよ

(麥尼紐士) あの上自由を與へなば。いかなる珍事起ると知れず

(馬爾士亞) とは言へ。あれを許さぬとき

(麥尼紐士) あの街道は修羅の道

(馬爾士亞) 誠にこゝろ

(麥尼紐士) 考へ所て御坐るわい

ト兩人よろしと思入れ在る。この處へ一人は使者花道より出

て来る

(使者) 改亞斯馬爾士亞様へ。おれに出でて、御坐りまする

(馬爾士亞) 我身先刻よりおれあり。シテ、いかなる急用ありや。早や中せ

(使者) ハ、唯今、窩爾西の軍勢が違おらぬ内。攻め寄るるとの報知が御坐りました

(馬爾士亞) サモアラン、これ某が望む處
(一同) エ、

(馬爾士亞) なまも左様お驚くことは御坐らぬ。使の者大義であつた

(使者) ハ、

ト使者花道へ立歸る

(馬爾士亞) イヤナニ、麥尼紐士殿。只今使者が申せし如き。窩爾士は

軍勢違おらず。我國內へ押寄するとのおと。賊も都合のよきことでは御坐らぬ

(麥尼紐士) スリヤ貴殿は。敵國の押寄せ来るを

(馬爾士亞) 如何にも都合よろしきおと

(麥尼紐士) ういまたなせよ

(馬爾士亞) サレバも御坐る。今若し他國と取ひなば。日頃五月蠅平民原も。國家安危此境なれば。鎮撫せずして静まり申さん

(麥尼紐士) シテ若し敵兵我國へ侵入し。家屋を壊ち人命を損ふとき。貴殿の如何せらるゝぞ

(馬爾士亞) 日頃の勇氣おふさしからぬ。用心過ぎる貴殿の思慮。拙者此度出陣なさば。敵を破らんこと掌を返へそり如し。拙者此命ある中は。無用此心配さし置き召され

(麥尼紐士) シテ貴殿よりこれよりいかゞ致さるゝや

(馬爾士亞)拙者のこれより宅へ歸り。それく出陣の用意な致さ

ん
ト云ふ處へ執政古美紐士。議事官茅度、拉爾周外より一人の議事
官及び民長入紐士、不慮多、西齊紐士、威流多。列をたゝして花道
より出来る

(馬爾士亞)ヤア向より來らるゝの

(麥尼紐士)慥かゝ議事院の人々達

(馬爾士亞)幸ひこれにて評議なさん

ト兩人よろしくある處へ古美紐士等入り來り。兩人は目禮し
て夫々よき處よ場所とる。一人の議事官進み出て

×ナニ馬爾士亞殿。貴殿が先日お話なされしは違はず。今度いよ
く窩爾西の達爾拉士、埃腓士を大將となし。この羅馬に押寄
せる由。誠な國家に一大事古美紐士殿への出陣を承諾せられし

が。貴殿はいゝと思はるゝ。御意得たきまゝ。こゝまで御訪ね申
を御坐る

(馬爾士亞)ろの出陣は某か望む處。各方は頗なくとも。吾より進ん
で出陣致さん

×スリヤ一方の大將とあり

(古美紐士)某よ力を合され

(茅度)窩爾西に向つて出陣

(三人)下さるとな

(馬爾士亞)如何にも出陣仕らん

トちよつと思入わめて

如何も茅度、拉爾周殿貴殿を吾々と共に出陣致され。老後此花を
咲かし召されぬ

(茅度)ナニ某の出陣せよとな。ソリヤ忝なし。駿馬年を経れば駿馬

なりどかや。されども拙者はさよあらず。仮令頭ふ白き霜を賦せ
腰に梓の弓を張ればとて。勇氣は撓まず。腕は蹇へず。年々歳々彌
々強し出陣せよと聞く上は如何んぞ後ぞき申そべき。御意此如
く出陣致し花々しく暇ひ申さん

(馬爾士亞)天晴貴殿のろの事詞。某感心致しては坐る。イヤナニ平
民共

此時市民共忙然として居る

ヤイ平民の奴原

これにて平民吃驚りそる

(市民)へいへいへい

(馬爾士亞)切迫りまりし場合故。其方共の願此趣吾等故障する此
暇なし。殘念ながら聞き届け呉れん。尙又敵國窩爾西は米穀金銀
お富みたれば其方共も吾等も隨がひ。是れより直ちお出陣致せ

敵國の金銀米穀の。其方等の勝手よ任るせん

○私共此願が叶ひ

□又ろの上よ窩爾西此

×米や金が取れることなら

⊕一生懸命

◎働まで

(二同)御坐りませふ

(馬爾士亞)ろうあつてこそ吾國民

(古美紐士)見よ。敵將埃那士。今よ一泡吹るせて呉れん

(馬爾士亞)彼も伏虎の勢あつて。幾百万騎押寄すとも。吾また飛龍
の勇を奮ひ神出鬼没の策を運らし

(茅度)散行く敵兵追立追詰め。斬立確立追捲くり。鎗の穂先よ敵將
の首を貫ぬき勇まし。勝鬨揚ぐるを睥く中

(麥尼紐士)ア、勇まし、く、首尾よき吉左右
×首を伸ばして

(兩人)相侍申す

(馬爾士亞)サレバ是より館お歸り。出陣の用意仕らん

(職事官此人々)左様致さん

(馬爾士亞)平民共も吾等も續づけ

(平民)ハ、

ト古美紐士先お立ち改亞斯馬爾士亞。茅度、拉爾周。麥尼紐士、亞
克立巴外より一人の職事官及び平民各々例をたゞして歸り行
く。二人の民長は跡も残り

(西齊紐士)ナントアアあの馬爾士亞の傲慢な奴では御坐らぬ

(不慮多)貴殿が言ひるゝ如く。是れが誠どの古今味曾有と云ふ奴
で御坐ろふ

(西齊紐士)吾々が民長に撰まれたとき

(不慮多)マアあの顔色と目付を見られたり

(西齊紐士)あれが誠此鬼の再来

(不慮多)悪いようて恐ろしい奴で御坐るわい

(西齊紐士)イツソのこと此度の戦争も馬爾士亞が討死し

(不慮多)ソシテ吾國が勝るバよふに坐る

(西齊紐士)ハ、ハ、貴殿の自分勝手ばかりハ、ハ、

ト兩人笑ふ

ろればそふと。出陣の出立のどんな塩梅で御坐ろふ。早やく行て
見ようての御坐らぬ

(不慮多)いゝあもろれが

ト兩人顔見合を道具かゞりの知らせ
よろし御坐ろふ

哥羅於
利府の
先年の
觀西人
爾西馬
が羅馬
より奪
しひり
あり又
た富爾
西の首
府の安
地亞な
れどと
この時
よは羅
馬を攻
めんが
爲め利
哥於利
府まで
進みて
陣を據
り居る
なり

ト兩人よろしくあつて道具まわる。

哥略於利府會議場の場

本御臺總べり會議場此体。あゝ、ふ富爾西の大將達爾拉士
煥腓丟士正面の椅子に腰をかき。二人此議事官それ左右
に並び居る

○某此此間諸處よて聞き及び候には羅馬の間牒我哥略於利府
内よ潜と竊りよ吾々の動靜を竊ふとのあど。ふん身等はまだあ
聞き召されずや

(煥腓丟士)某疾くよりあの事を察せし故。先達我服心此者を羅馬
に使用し竊かよ敵の様子を窺ひせ置きたる處昨日届きしこの
手紙

ト國中より一通の手紙を取出し。いと高うらよあれを讀む
取急ぎ候まゝ短文を以て申上り。隙に羅馬に於ては己よ我國の

舉動を覺り。我國の攻め來らぬ先よ。大軍を以て逆寄せんと。目下
切りよ軍兵を募集致居候尙又討手の大將は。未だ判然仕らず候
へ共。當今府下の風説よて。古美紐士大將となりて総軍を指揮
し。有名なる老將芽度拉爾周及び羅馬隨一の驍將改亞斯馬爾亞
士これが兩翼となる由よ御坐候隨分御用心遊ばさるべく。右の
聞き込たるまゝ。取敢へずは報知仕候。余の委細探索此上にて申
上べく候以上尙々目下羅馬府の飢饉甚はだしく。一揆暴亂絶ゆ
る間なく。上下の心離反致し殆んど讐敵共如く相見へ申候あ
れまた併せて御報道

ト手紙を卷く

○ヤアその手紙の趣よてハ

□敵國羅馬は我國の機密を覺り

(煥腓丟士)いかよも我國へ攻め來る由。斯なる上は我をまた急ぎ

出陣の用意致さん

□ 何の鬼を恐れぬ貴殿は。吾物軍の大將となられ。一時も早く陣所へ赴かれたし。某等の當府を留まり用心堅固に守護致さん。若し敵軍の都を圍みなば。貴殿も歸りてお救ひ下さるへし。○ 併し某察する處。敵國は未だ用意調はず。發軍するよ日を伺らん。寧ろこれより貴殿の吾物軍を引き供して。敵攻め來たらぬ其先。押寄せられて。如何で坐る

(埃腓丟士) うは貴殿此の心得違ひ。敵勢の早や發府を。この都をさまたて進みつらん某は。されより暇なし。軍兵引連れ一時と早く吾國境へ出陣致し拒ぎの用意仕らん

ト立上る。○ 印あれを止め
○ ア、イヤ暫くお待召され今度敵方の大將は音に聞こへし古美紐士あれを助くる馬爾士亞は殊も古今無比の騎將茅度は已

よ老ひたれども。これまた一々の大將なり。あま三傑揃ひ居れば中々以て侮り難し。就中馬爾士亞は百戰百勝の豪雄なれば。必ならず心を免るし玉ふな

(埃腓丟士) 刀物を断たざれば。利鈍を知る能はずと。や。我亦た勇將と戦を交へずば。何の日もか我力を試むることを得ん。假令改亞斯馬爾士亞。方夫の力を備ふるとも。よも鬼神にては候まじ彼も人なり吾も人。何の恐るゝ處あらん。方々の油断せぬ様當府を守り。勝利の吉左右お待あれよ

○ ろのお詞を聞く上。吾々あ於ても大に安堵。此は哥略於利は吾々が

□ 命よりけて
(三人) 守り申さん
(埃腓丟士) さらば出陣

(二人)致さるゝか

ト三人よろしとあつて。道具まゐる

馬爾士亞館の場

本舞臺部屋の体。こゝに馬爾士亞の女房窩留路利針仕事
をなし居る 但し庭木等総て秋の体

上「日と西山お入相を。告ぐる遠寺の鐘此音。冊を慕ふ村鳥も憐れ

添ふる黄昏時。窩留路利の只だ獨り。夫此ことを兎や角ふど。案

じ煩ろふ心根を。細き手先の縫針も。思ひまざらそ其風情。霜よ

惱みし白菊の。萎れかゝりし如くなり。後の襖押開き静るゝ出

ずる窩流美亞

ト窩留路利の母窩流美亞與より出て來る。窩留路利されを知

らぬ

(窩流美亞)コレ嫁女。コレ窩留路利

花の葉の
拵の作
れをこ
りて他
の軍勢
を救ひ
しとき
賞とさ
ふて興
のふる

ト椅子をたゝく。これにて窩亞路利吃驚する

(窩留路利)貴方の母上。吃驚致しました

(窩流美亞)ろなたの馬原士亞。首途した其日より。只だくよ

と戀愛で居やるが。些どは浮々して。たまには唱歌でも歌を氣晴

をしやらぬか。悴ぐこと案じるよ及びませぬ。彼れは。幼少

時より人並勝れし勇氣ありて。今まで幾度の戦も。敗北せしあど

絶えなく。其歸る度毎よ。いと名譽ある花鬘を。頂かぬと云ふあど

あま。虎の巢に入らざれば。其子を得るに由なしとかや。武士とて

も其此通り。國の爲たよは死するも厭はず。風に櫛り雨よ沐ま

千軍万馬の中よ。驅け入り。死地に入て。再び生き。蘇るはまた死

地よ。陥り。艱難よ。堪へ辛苦を。凌ぎ。人並勝れし手柄をしてこそ。始

然てその名も。四面よ。輝やき。武士の鏡ともなるべけれ。妻を愛し

子を慕ひ。只だ安閑と家お坐り。武士たるもの。がなみを爲すぞ

や。假令作は戦場の果なき露も消ゆるとも。され武士此常なれば
あ。の母は決して。嘆きませぬ。うなたも亦た武士の妻。氣を取直し
て大切に。夫の留守を守るがよいぞや
上「男まさりの母親の詞は遺が耻ひて

(窩留路利)今母上様の仰しやる通り。戰場にて國の爲に命を捨つ
る。武士の本意。うれの妾も知らぬでは御坐りませぬぞ。夫が出
陣遊ばしてより。夜はいづこの野原よそ。戈を枕し伏し給ふ。晝
のいりある戰場にて。鏃を削り居給ふ。と。あればつうり氣まな
りまして。ツイあの様な悪い顔を。母上様は御目よかけた。此で御
坐り。あの後の決して案じませぬ故。とふぞ堪忍して下さりま
せ

上「顔色直ほせば母親はいとゞ機嫌も嫁女を眺め

(窩流美亞)さふなふていならぬ筈。それでこゝろ武士此妻。あの母な

ぞい更よ未練を心持ちませぬ。國の爲に討死せば。伴のみか吾
家此舉。假令あの母よ幾十人の男子あつて。皆な討死して果ける
と。決して惜く思ひませぬ。これよ引かへ獨子でも。放蕩無頼の
腰拔なれば。誠よくやしう思ひませぬ。窩留路利さふていない。う
上「と言ひ放したる老母の。徹。窩留路利は應答あね。暫し詞をな
かり。折志もあゝよこの家の下女。こゝどしを出て來り
ト下手廊下口より下女出て來る

(下女)御後室様。只今華別利様。御見舞。旁御出まなりました。あれ
へ御通し申しませふか

(窩流美亞)ナニ華別利様。御出とナ

(窩留路利)丁度淋しく思ふ折柄

(窩流美亞)早ふこれへ御案内申せ

(下女)ハイ

ト下女下手へはいる

上「ハイと答へて出て行きし。後よ二人の衣紋をのくるひ

トあゝよて二人容をなをす

上「待間程なく。静々と侍女引連れ。華別利會釋なしの、入り来る

ト華別利二人の侍女を連れて下手廊下口より出ずる

上「それを見るより二人の迎かへ

(窩流美亞)よふマアお出で下さりました

(窩留路利)妾の貴女のお出を待て居りまじだ。マアおれへおかけ

なされませ

(華別利)有難ふ存じます。さよふなれば御免下さりませ

上「差出を椅子に腰打ちけ

ト華別利椅子に腰をかける

上「華別利の兩人に向かひ

(華別利)馬爾士亞様が御出陣あされまらば。無お淋しいことにて御坐りませふ。見れば窩留路利様も何針仕事。何又を舟縫ひ遊ばしませ。シテあのお子さまは御達者にて御坐りませるか

(窩留路利)ハイ難有ふ存じます

(窩流美亞)あの子は暇争事が大好きで。今日も乳女と一緒に遊んで遊んで居りませふ

(華別利)子は親の性を引くとか申しませが。誠又あのお子は父さん似て御坐ります。大きふおなり遊ばまたら。さぞ親父の様に。指折り此豪傑もおなりなさるで御坐りませふ。妾の四五日前あのお子ど。半時ばかりも一緒に居りました。如何にを決断のよささふお御人相で。末々は天晴な御出精を遊ばそあど。陰ながらお羨ましふ存して居りました

上「孫と我子を譽められて。二人は心よ喜べど他人此手前耻らひ

けん。態かたぞと作りし苦くる笑わらひ

トこゝふて二人笑ふるとよろしくある

上「華列利はうれと察し

(華列利)ソレハさふと窩留路利様よは。これから妾と一緒に出

かけなされませぬか

(窩留路利)あり難ふの存じますれど。今夜の辭り申しませふ

(華列利)お出でなさらぬので御坐りませう

(窩流美亞)お此よふとお勸たえ預うればお伴ばんをなすが宜いであ

らふ

(窩留路利)アノオ妾は夫馬爾士亞殿が。戰場より歸らるゝられま

て。國くにより外へい出ぬ積で御坐り舛

(窩流美亞)夫れいまたどふした詫わらで

(窩留路利)ハイそれい別お。仕事の手間を惜むと。又と夫と聖せいた

られよふと思ふそのことでも御坐りませぬぞ

(華列利)ア兎も角を妾と一緒にお出かきなさせ

(窩留路利)どふぞ今夜だけはお許し下さりませ

(華列利)妾と一緒にお出遊ばすぞ。アノ馬爾士亞殿の手柄てがま話はなしを

聞かせ申ますぞへ

上「云ふ二人は膝ひざより寄せ

(窩留路利)エ、ろりや貴女。何かおきゝなされたので御坐りませ

うへ。妾共はまだ一向いっこう存じませぬ

(窩流美亞)緘しんのおどならどふぞこゝよ。お聞かせなされて下さ

りませ

(華列利)ホ、さふお頼みならお話申ませふ。妾は今日。或る職事

官より聞きまし。が。窩爾西人は大軍を發して。我國の進軍を拒

みしを古美紐こみづな隊たい此兵士を率めてこれ又當られ。馬爾士

亞様と茅度様の両方の敵は據所哥畧於利を圍まれ味方此諸將
ハ孰れも十分の勝利ありて。戦も程なく結着するの見込ありと
馬爾士亞様より報知ガ在つたさふで御坐ります

上「聞て窩留路利胸撫をろし
(窩留路利)母上様お喜び遊ばしませア、ろれて妾も安堵致しま

した

上「いろくど志て喜べば華列利の片類も笑み

(華列利)うよふあ話ガあつた故。妾と一緒も出でなされませ

と申したれで御坐りませ

(窩留路利)誠又妾としたことガ、何卒お許し下されませるの

後ハ何事も貴女ハお詞も従ひます

(華列利)ハ、ハ、ハ

ト笑ふあどよろしく在て

時よもふ夜も更けたよふなれハ。妾ハ暇中ませふ

(窩留路利)ア、も少しお話しなされませ

(華列利)また緩りとお伺ひ申ませふ

(窩流美亞)何れ風情もなく。誠又失禮致しました

(窩留路利)またお出で下さりませ

(華列利)雖有ふ存じ舛

上「華列利は静々と立て坐を離れ。侍女引連しとやかよ。我家を指

して歸り行く

ト華列利及び二人の侍女下手へはいる

上「後よ二人ハ氣もいそく

(窩流美亞)嫁女安心するがよいぞや

(窩留路利)妾ハ胸がスツと致しましたぞ

(窩流美亞)ア、あ母も少しハ安心しましたわ

上「遺が氣強き母親も。吾子の様子聞きてより。初の言葉ごあへや
ら。只だいろくくと喜ぶにう。争ひ難き親子の情愛。まゝ是非も
なき理なり

トあゝにを兩人宜くある

上「窩留路利の母も向ひ

(窩留路利)母上様今夜の早く。お休を遊ばされませ

(窩流美亞)オ、お前を安心して休むがよいぞ。よドレ緩りと

(窩留路利)サアお休みなされませ

ト兩人よろしくあつて幕

○二幕目

哥畧於利府外の場

本郷畧一面野原を遙りよ哥畧於利府を見せる

但し朝の景

上「こゝの処も哥畧於利を。遠見も持ちし荒野原。霜置く草も朝日
影。さし来る色も面白く。秋の荒野と云ひながら。また味ひある
景色なり。折しを遠音も人馬の物音

ト遙りに鈴の音聞ゆ

上「と見る所も彼方より。手勢引俱し堂々ど。あゝと出来る馬爾士

亞あとり眩ゆき甲冑も。うの身を固め勇ましく。馬上もスツと

立つたる有様。まゝと天下も并ひなき。勇將どころの見へにけ

り

ト馬爾士亞甲冑も身を堅め。劍を帯び。楯を持ち。騎馬もて花道

より出で来る。次は茅度同じきいで立よて十人計の雑兵を

従がへ出で来る。但し軍旗喇叭大鼓等行列よろしく在る

上「馬爾士亞の手綱をひかへ

(馬羅士亞)我羅馬勢あひの処まで押寄せたれば。早や敵府より開戦

の同圖をなすべし。吾軍をまた承諾此合圖を上かん。吾々の府を
攻め取りなば。血汐したる刀を提げ。大將古美紐士殿の加勢お
行くべし。早く開戦此合圖が揚がれば宜いものじやナア
上「勇み切つたる健雄。満月も張りし梓弓。放ち無ぬたる其顔色
當り難くぞ見へよ。折ふし來かゝる哥畧於利府民
ト三四人の市人下手より出で來る

上「目早に見付け馬爾士亞

(馬爾士亞)ア、これ待て。夫れへ行くは哥畧於利府内此者でいな
いる。汝等も尋ね問ふべき子細あり。近ふ参りて身共が問ふこと
に答せよ

上「呼び留められ志市人の驚見られし小鳥の如く。慄へながら
又遣ひ寄て

ト市人等恐れく馬爾士亞の馬前又來る

○ハ、何を尋ねり存じませぬ。答の出來る丈けは答へ
申上まを故
△命ばかりい。どふぞお助け下されませ

(馬爾士亞)高の知れた雅樂多者。五人や六人殺したとて。何の役お
も立たぬこと。殺しぬせぬ故少志も恐るゝあどのない。イヤナニ

市人。哥畧於利府内に健爾拉士埃腓士は居るか。どふじや

○ヘ、大將埃腓士様は。早や城中に居られませぬ。併し吾國
の侍士方を始とし。吾々共の様な市民迄。今おを羅馬勢來りおば
只だ一戦お討ち破らんと。ソレハモッ勇立て貴方々の來られ
るのを待て居ります。ア、あの喇叭の聲をお聞きなされませ

上「云ふに諸將即そば立

トあのととき喇叭の聲遠音に聞あ

(馬爾士亞)アレ、く、あれの進軍を

○いゝよと知らせる喇叭は聲で御坐りませ

□私共の悴等も。今度の戦は皆な出て居りませ

上言ひあけたる折しもあれ。風が持ち来る閃の聲

ト閃の聲聞ゆ

上聞く市人の口くくよ

(市人)ソ、リヤ、コソ、大變の戦が始まつた

上足もしどろよ逃げて行く

ト市人下手へはいる

上馬爾士亞は。目も付かず馬上より立ち大音上

(馬爾士亞)さきは敵軍門を開き。戦を挑むと覺るたり。小瘡あ奴原

思ひ知らせん。コリヤ、味方の軍兵共。強き敵は當るとを必ならず

恐るゝことなかれ敵の刀お死をるとを。夢々後へ退くな若き

怯の振舞せば。立地は吾刀の錆とあるさん。イザ茅度殿も進ませ給

まへ。者共我等お續くべし

上鬼神も等しき勇將は。心も武けき勇駒。手綱うひ繰り静々と乗

り出ださんとする折しもわれ。馬前を遮る劍の稲妻。ドツと上

げさる閃の聲

ト窩爾西兵十人計右の手は鎧左は楯を携へ閃を作て下手よ

上心得たりと馬爾士亞。馬上より立ち打ち眺た

(馬爾士亞)ハ、ハ、ハ、閃を作つてさようく。しく。吾に戦を挑

し。奥扉。士と思の外。取るよも足らぬ木片武者。刀を抜くお

及ばぬ。味方の雜兵共。早く彼奴等を追ひ散らせよ

(雜兵)ハ、

ト双方戦ぬませよろしくあつて。後ち戦ひながら下手へは

上 敵と味方を見送りて。馬爾士亞は茅度より向ひ
(馬爾士亞)茅度殿暫時こゝに休るふ。軍の様子を見よふては御
坐らぬ。

(茅度)それが宜志ふ御坐るふ

ト兩人馬を下り。石よ腰をうたる

上 二人の勇將馬を下り。暫し休るゆ程もなく。敵の葉武者も追ひ
まくられ。しどろよをりて吾先と。逃を歸たる味方の雑兵

ト雑兵共 ホフ 此休めて下手より逃げ来る

上 この休見るより馬爾士亞の怒の面色遮立つ。鬘と立りて
聲ふり上る

(馬爾士亞)ヤア言甲斐なき奴原のな。先程言聞けしことを忘れ
し。假令自分へ輕ろくとも汝等の耻辱は羅馬の耻なるを

辨まへ居らぬ。彼程の者と戦て。此逃さまい何事なるぞ。あの
後がよふな。振舞あらば。一人も残らず細首打落とさん
(二同)ハ、

ト一同よろしくゐる。この時聞の聲聞あへる

上 又も聞ゆる。聞此聲。と見る間よどや 群り出でたる窩爾
士勢

ト窩爾士兵十人計下手より出で来る

(窩爾士)兵 ヤア ぐ ぐ

上 馬爾士亞屹度睨まへ

(馬爾士亞)エ、五月蠅き敵の小わつば奴等。左程命が捨たなくバ
冥加お餘まる吾刀で。應生させん觀念せよ

ト双方とろしく戦ふ。窩爾士勢終ふ叶はず花道さして逃る
馬爾士亞茅度及び雑兵等追て行く。こゝよ道具まひる

哥羅於利府門の場

本舞臺一面門外の休にて。上手は大なる門を斜に見せる。此
又馬爾士亞五六人の窩爾士兵を相手と戦ひながら花道よ
り出て来り。立廻り宜しく在て。後ち窩爾士兵を追ひ散ら
上「散行く葉武者も目も留たず。滴たる血汐も咽をうるほし。刀を
杖も静々ど。府門間近く進み寄り

ト馬爾士亞門此邊より寄り

上「大地も響びく大音上

(馬爾士亞) ヤア敵の奴原能く聞々。今羅馬より此名ある。改亞斯馬
爾士亞切り入るぞや。弱きものへ逃去れよ。強きものへ首を洗
ひ。敵を出て、討死致せ。冥土の引導渡して呉れん。味方の者共吾
も續け分捕するはこ此時なるぞ
上「吾も續けと言ひ捨と。虎狼の巢なる敵陣と。事どもなさず只だ一

騎。風を切らしと道みまこそ。勇ましくもまた危ふけれ。

ト馬爾士亞府門中へはいり

上「跡は兵士の顔見合せ

○ア、アたけと獨りて。あの大勢の中へ切り入るとい。あれがほ
んの猪武者と云ふも此じや。己等達へあんな馬鹿な真似をす
るのいやじや

□ソオトモ、あれがほんの命知らずじや。ア阿房な奴もあ
ればあるも此じや ナア

あの時府門へまる

△アレ、あれを見やれ。門の戸をメたたじやない

○モッあふなめては。退がの馬鹿大將を叶はぬ

□嗚今頃の敵の爲めよ。斬り殺ろされて居るてあるふ
ト云ふ内花道より茅度二三人の敵を相手と取ひながら出て

来り下手口よて敵を追ひ散らせ

(茅度)馬爾士亞殿よ。如何なされしぞ

□モフ 今頃の殺され居やしやるよ。相違御坐りませぬ
上云へば茅度の不審顔

(茅度)そはまたなせよ

○サレバ 御坐りませ。先程大將馬爾士亞様よ。只た一人よ。門の中へはいられました。此後直と御覺の如く門の戸を閉まじたれば。私共は切入ること出ませず。皆集りて。評議をして居るとあるて御坐ります

□ろれじやに依て。最早や死なれたと申すので御坐り升

上聞くより茅度の齒ガミをな。府門の方を打見やり

(茅度)サア一人よて切り入れしか。ア、天晴なる勇士かな。吾一足早うりせば互よ力を戮せんを此を。ア、後れたり残念至極

去りながら馬爾士亞殿此となれ。敵幾百騎よて圍むと。容易くの討取り得ざるべし。ア何よ致せ残念なことて。あるわ

トよろしくあつて。雑兵に向ひ

コリヤ汝等の大將の勇氣よも似ず。をめぐゝあゝ止まるど。誠よ卑怯此振舞ならずや。今にも大將歸られなば。無怒らるゝことならん

ト云へば雑兵共は小さきある聲よて

○大丈夫氣遣ひなし

□大將のふあ世だ

△叱あられること。堀王をない

(茅度)何を云ふのだ。馬鹿者め。不吉を吐くと承知致さぬぞ。上叱り罵る折さ。それ。府門を開き敵勢お追はれ。追ひつ取ひ

後。出來りたる馬爾士亞

ト馬爾士亞府門を開き。十人計の敵を相手に戦ひながら出來

上^上真紅を染た出だす。血汐を啜りて息を次ぎ。反たる刀を直

し。又さ立かゝる有様を。見るより茅度盛を上

(茅度) ヤア馬爾士亞殿。茅度こゝを控うへたれば。假令幾百人押寄

せ來るとも。必ならず撓み玉ふなよ

(馬爾士亞) ヤア茅度殿。軍兵引俱し來られよ。府内よりけ入り花々

しく残りし奴原追ひ拂らへん

ト云ひながら再び門の中へはいる

上^上聞くより茅度勇み立ち

(茅度) 者共我も續ひて來たれ

(一同) ハ、

上^上ハツと答へる兵士共茅度の後より從かひて府門さしぞ入り

みけり

ト雜兵等茅度の後より續ひて。門の中へはいる。こゝより道具ま

わる

哥^哥畧^畧於^於利^利府^府内^内此^此境^境

本^本舞^舞臺^臺一^一而^而市^市街^街の^の休^休。あゝ、又^又羅^羅馬^馬の^の軍^軍兵^兵三^三人^人計^計り^り手^手み

分^分捕^捕物^物を^を提^提か^かる^る花^花道^道より^{より}本^本舞^舞臺^臺へ^へ入^入り^り來^來る

□ ヤット、ドッコイショ。ア、^ア喧^喧い^い。皆^皆の^の衆^衆少^少し^し休^休ま^まふ^ふて^てい^いな

らぬ

(一同) ろれが宜からふ

ト荷物を下ろして休む

○ 已^已い^いあ^あれ^れを^を。羅^羅馬^馬に^に持^持ち^ち歸^歸へ^へら^らふ^ふと思^思ふ^ふさ^さい

□ 己^己は^はま^また^た。あ^あれ^れを^を持^持て^て歸^歸る^るは^はじ^じや

△巳の取たもの、慥たしめ銀ぎんじや。羅馬ろまも持ち歸かへれば、余程よほど此金こゝのあなるわい。この様なこと、知たら車位くるまゐひの引張ひきちも来る處ところじやつたよ。ア、惜あはひあどをしたわい

○ッレはろふと馬爾士亞マルシアは随分強い奴やつでいな

□ア、元氣げんきな奴やつじや

△己等おれらの殆たいていんど恐れ入つたわい
ト云ふ内こへ馬爾士亞マルシアの兩將りやうしやう五六人の郎等らうとうを引き連れ下手より出て来る。軍兵共よろしくある

(馬爾士亞) 茅度殿チヂあれを見られよ。某たれの危急ききゅうをも願ねがはず。軍いくさをなせば逃にかく隠かくくれとる癖くせに。敵走てきそうり當府あたふ吾手われてお入りたるとき、我先われまへと分捕ぶんとをなす。まことまゝ卑怯ひしやうな奴やつでい御坐ござらぬ

イヤナニ 茅度殿チヂ。某たれは是れより古美紐殿コメニウテンの陣所ちんじよも赴おもむき。埃あはれ

士しと刃やいばを交まゆる所存しよせんに御坐ござれば。貴殿あなたは兵士へいしを一緒いっしょままとめ。堅かく此府こゝのを御守ごまもり下され

(茅度) ろの勇いさましきことながら。貴殿あなたは再度またの進撃しんげきも満身まんしん血ちを以もつて染それたる如ごとし。日頃ひごとの強壯きやうさうなる貴殿あなたなれど。さぞやお勞あはれ召よされしならん。殊また又た。あの府ちは貴殿あなたの働はたらにて。全く我手われても落ちしなれば。貴殿あなたの務つとめ已まひ終はれり。されば貴殿あなたのこゝも止とまり。暫しばし休息きゆうしなさるべし。某貴殿あなたも代かて余らん

(馬爾士亞) ろの御心配ごしんぱいは御無川ごむせんなり。これしきの働はたらみでは。未だ某たれの勇いさを尽くそと足たりらず。又と幾許いひやく血ち汐しほの流ながるゝども。其如ごとき強か壯さうの身体からだには。藥くすりとなるども害あやむることなし。イデあの儘ごとく

大將たいしやうの陣所ちんじよよりけ付つけり。敵將てきしやう埃あはれ土ちを惱なませ申まさん

(茅度) 實じつも願ねがひもしき。此こゝお詞ことば。見事けんじ勝利しやうりを得え召よされよ
(馬爾士亞) 忝かたじけなし。貴殿あなたもこの府ちを堅固けんこも守まもり召よされよ。追

花付け吉左右あ知らせ申さん

ト花道さしてゐる。茅度見送り

(茅度)ア、古今無比の勇將かな。實は吾國此干城じや。ナア

ト感ずることよろしく在る。こゝにて道具まはる

古美紐士陣營の場

本舞臺總て陣中体。あゝ古美紐士及び兵士等退陣して花道より出て來り。直ぐと本舞臺へあゝり古美紐士上坐り住ひ。兵士等左右に居并ぶ

(古美紐士)いづれも暫し休息致すべし

(一同)ハ、

(古美紐士)ア、いづれも見事に戦ふらり。退陣するよを列を乱さぬにば。身も感心致たぞ

(一同)難有ふ存じ升

(古美紐士)あふ云ふ内にも。敵勢寄せ來るやも圖かられぬば。必ならず油断致すまいぞ

(一同)畏れて御坐ります

(古美紐士)それいそふと。哥畧於利へ向ひし兩將は。如何致せしならん。吾等最前戦ふとき。風の吹き來る度毎も。敵か味方か知れぬども。喇叭の響叫の聲手も取る如く聞へまが。未だ何れ報をなし味方の少なく敵は大勢ア、心をどなきことていあるまい

トよろしと思入あつて。古美紐士屹度居直はり

(古美紐士)この戦は。實は羅馬の榮枯にかゝるものあれば。羅馬の神を必ならず助け給ふべし。吾もまたこれを願はん

ト古美紐士羅馬此方に向ひ。手を合せて拜ぐむあの時使者花道より出て來る古美紐士打ち眺め

(古美紐士)夫れへ來りまは。哥畧於利より此使者でないか

(使者)ハア左様又御坐りませ

(古美紐士)シテ哥畧於利の様子いかに

(使者)ハ、哥畧於利府又立籠りたる窩爾西勢不意又門を開ひて
進み出で。馬爾士亞茅度の兩將に向つて戰を挑むよぞ。味方ハ兩
將心得さりと。士卒を指揮して戰かひしよ。如何あしけん追ひま
くられ。しどろよなつて。敗北致さて候。拙者はこの由注進せんと
只だ一人おて立歸て御坐ります

ト息せきて物語る。古美紐士不審顔

(古美紐士)フム、汝の申す所如何もいぶうし。シテ其敗走せし
は何時頃なりしぞ

(使者)凡ろ一時間計前よて候

(古美紐士)哥畧於利府よりあの陣まで。一里足らず此道程あるよ
何故あつて一時間と云ふ。長き時を費やせしぞ

(使者)其御不審御尤よは候へども。拙者あの御陣所へ参る途中。圖
からず窩爾西の間者又出逢ひ。殆んど捕へられんとしたりしを
漸々切抜けて候ひしが當抵本道へ通ること叶ふまじと察せし
かば。是非なく三四里計の道を迂回し。間道より参りし故かくい
手間取りまして御坐ります

あの時陣外又聲あつて

(馬爾西亞)改亞期馬爾士亞。只今あれへ参上致て候。遅参此儀眞平
御免下被

ト馬爾士亞花道より出て来る

(古美紐士)貴殿ハ誠又馬爾士亞殿。何は兎もわれ先ずく。これハ
(馬爾士亞)然らば御救じ下被

ト馬爾士亞本舞臺へ來りよき処に住ふ。古美紐士これを打見
やり

(古美紐士) 見れば満身赤く染り血の滴り居る太刀を提げらるゝ
の問はずと知れた貴殿の勇戦。ア、武士の花どの貴殿のこと。さ
つもながら某感心致して御坐る

(馬爾士亞) ハ、ア これしきの働よ。そのお詞は過分な候。シテ、
貴殿の已に戦ひ召されまゐる。まだ戦ひ召されぬ。

ト問懸ける。古美紐士おれよて氣が付き

(古美紐士) アモ 某としよあど。誠又祖忽千万。吾様子の後よて告
か申さん。先づ貴殿方の様子をあん聞せ被下

(馬爾士亞) 御安堵召され古美紐士殿。哥畧於利府の已に我手よ落
て候

(古美紐士) ナコスリナわの哥畧於利を

(馬爾士亞) いるよも首尾能攻取て御坐る

(古美紐士) ハア、忠ありく。シテ 茅度殿の

(馬爾士亞) 茅度殿は哥畧於利府よ止まりて。士卒に百般の命令を
下し。又た敵の罪科を処断し居らるれば。決志を御心配に及び申
さず。羅馬府の名を以て。哥畧於利府内のあどを処置するの。手綱
を以て馬を馭する如く。誠又心地よき有様で御坐る

(古美紐士) ア、出来し召された。ンにて安堵致して御坐る

ト使者の方へ向ひ
ヤ、ろあな狼狽者奴が。羅馬勢が追ひまくられし杯と思しき不
吉の詐注進。コノ者共早々彼奴を引立てよ

(雜兵) ハ、

ト立かゝらんとする。馬爾士亞押止め

(馬爾士亞) ア、イヤ 暫らく御待ち召され。彼れが注進決して詐よ
ては候はず。全く彼れが申せし如く。某等初の一度の不覺を取り
し。と再度此進撃よ。某始と味方の軍兵。必死となつて戦ひし。

ば。遂に敵兵を追ひ退け。首尾能哥略於利を取りたので御坐る
(古美紐士) ハ、ア左様で御坐りしう。トハ知らずして今の失言使
の者免してくりやれよ。コレ者共彼も何る取らせて呉れ

(雑兵) ハ、

(使者) 難有存じ升

ト雑兵に連れられて下手へいいる

(馬爾士亞) シテ貴殿の御様子ハ

(古美紐士) サレバサ。某己も埃腓士と戦ひしかど。敵の鋒先鋭く

して味方これより當り難く。只此一戦にて逐ひ立てられし故。如何
おも無念よて候ひしガ。一先茲へ引揚かんと。只今退陣致せし計
りの處で御坐る

(馬爾士亞) フム、左様で御坐るガ。シテ敵の銳兵のいづれも陣營

と張り。又た何人おれを統べ居り候や

(古美紐士) 精銳の兵ハ。即ち敵の先鋒よて。埃腓士おれを統べ
候

(馬爾士亞) シリヤ敵の精銳ハ先鋒よあり。埃腓士これを率ゆ

るとな。然らば某貴殿も一ツの願ガ御坐るが御計し被下れふや
(古美紐士) シテアの願どハ

(馬爾士亞) 願ど申すは餘の儀よ候はず。哥略於利を攻め取りた
る功よ死じ。何卒某を以て貴殿の先鋒へなさせられ。埃腓士の
精兵猛卒と鋒を交へさせ被下。然るときハ某一生の勇氣を絞り
敵ハ先鋒を崩去申さん。おれとき貴殿を猶豫せず。勢作て進まれ
なば。一戦よして敵兵を盡み致すべし。サア貴殿の御所存如何で
御坐る

(古美紐士) 左程貴殿が望みれば。某いゝてか拒ま申さん就てハ
我軍中より貴殿のお氣に叶ひし兵士。誰も限ぎらず抽き取られ

よ

(馬爾十亞)そは何より忝な志。某が欲する兵卒は。今某の身体此如く。赤に染まるを喜ぶ者。又た性命を輕んじて。名譽を重ざる者。又た國の爲め。命を惜しまざる者。此の三者を備ふる者。假令雜兵口取たりとも。某好んで手兵と致さん

(古美紐士)さらば是れよりお擧り被下

ト與此方又向ひ

ヤア

大勢此兵卒共。今汝等のその中より。忠あり義あるものを撰り出さるゝ筈なれば一同あゝへ罷出てよ

(二回)ハ、ハ、ハ、ハ、

ト答を合圖に道具まわる

哥略於利府門外の塙

本舞臺總て門外の体にて。稍々遠目お府門を見せるるゝよ

茅度一人此副將及び十人計の兵卒を引き連れ上手より出て来る

(茅度)身のされより古美紐士殿此許へ參れば。跡の身が手配せし如く。諸処の門を堅固に守護し。必ならず油断なすべからず。若し身が使者を送りしとき。援兵として幾許の兵士を送るべし。暫時この府を守るには。殘兵よても難たがらず。これより引き入り。吾等敗北なすとき。到底此の府も保つべからず。この旨粗忽お心得へな

(副將)大將少しも心配し玉ふな。拙者引受てこ此府を護り申さん。又た大將より使者來らば。必ならず援兵を送るで御坐りませう。(茅度)よし。然らば直様城門を鎖して宜らふ。イザ身のこれより參るべし

(副將)左様ならば大將よ

(茅度)随分共よ油断せぬよふ

(一同)畏を御坐ります

ト茅度兵卒を引き連れ花道さしてはいる。副將見送りて

(副將)ドレ府中へ歸らふる

トよろしくある。こゝよて道具まゐる

兩將決闘の場

本舞臺一面荒野原。遙るよ小丘ありてろの麓よ羅馬窩爾士の兩陣營を遠目よ見せる。あゝよドツと四此聲四方よ起り右の上手より馬爾士亞左の上手より奥腓丟士各々花やうなるいで立にて。楯を携へ劔を振りながら出て来る

(馬爾士亞) ヤア宜き所よ奥腓丟士。我汝を待ゆこと已よ久し我汝を切つて刀此利鈍を試みん。汝も未練此振舞なさず。首を洗を觀念致せ

(奥腓丟士) チヨコザイなり馬爾士亞。汝吾國よ來りしハ虎狼の口に入りしと同然。今迄命を繋ぎしは。吾手よ死せる心ならん。冥加よ餘まる吾刀温和よ受けて成佛致せ。首を切らふう手う足か。或は真向より始ふや。望みに任かせて手を下ろさん

(馬爾士亞) ハ、ハ、ハ、好くも言へたり腰拔武士。あの世の名おりよ今一度。我言ふこと汝能く聞け。三時間前吾一人おて哥略於利府内に進入し。瞬く隙に乘取たり。我全身よ滿る鮮血は汝同胞此鮮血とは知らざるか。舊巢を失ふ鶴鶴。路傍よ餓死なさんより今天下に二人どなき。勇將馬爾士亞の手よかゝり。刀の鏽と消へんあろ。武士たるを此、本意ならん

(奥腓丟士) シヤ案外なる非禮の過言。假令哥略於利は落つるとも何ぞ路傍よ餓死なさん。無だ口きうずと覺悟を致せ

(馬爾士亞) 何を

(兩人)小癩な

ト兩人立廻る處へ窩爾西兵三人左の下手より出て來り。塙
手士を助けんとする。塙手士戰あがら盛をるけ

(塙手士) ヤア汝等あゝよ來りなば。勝を得たる其時よ助勢の爲
此も勝つたりと人よ指ざし笑われん。無用の助太刀控へて居れ

(四人)じやと申す

(塙手士) エ、五月蠅き奴原うな控へど申せば控へぬり

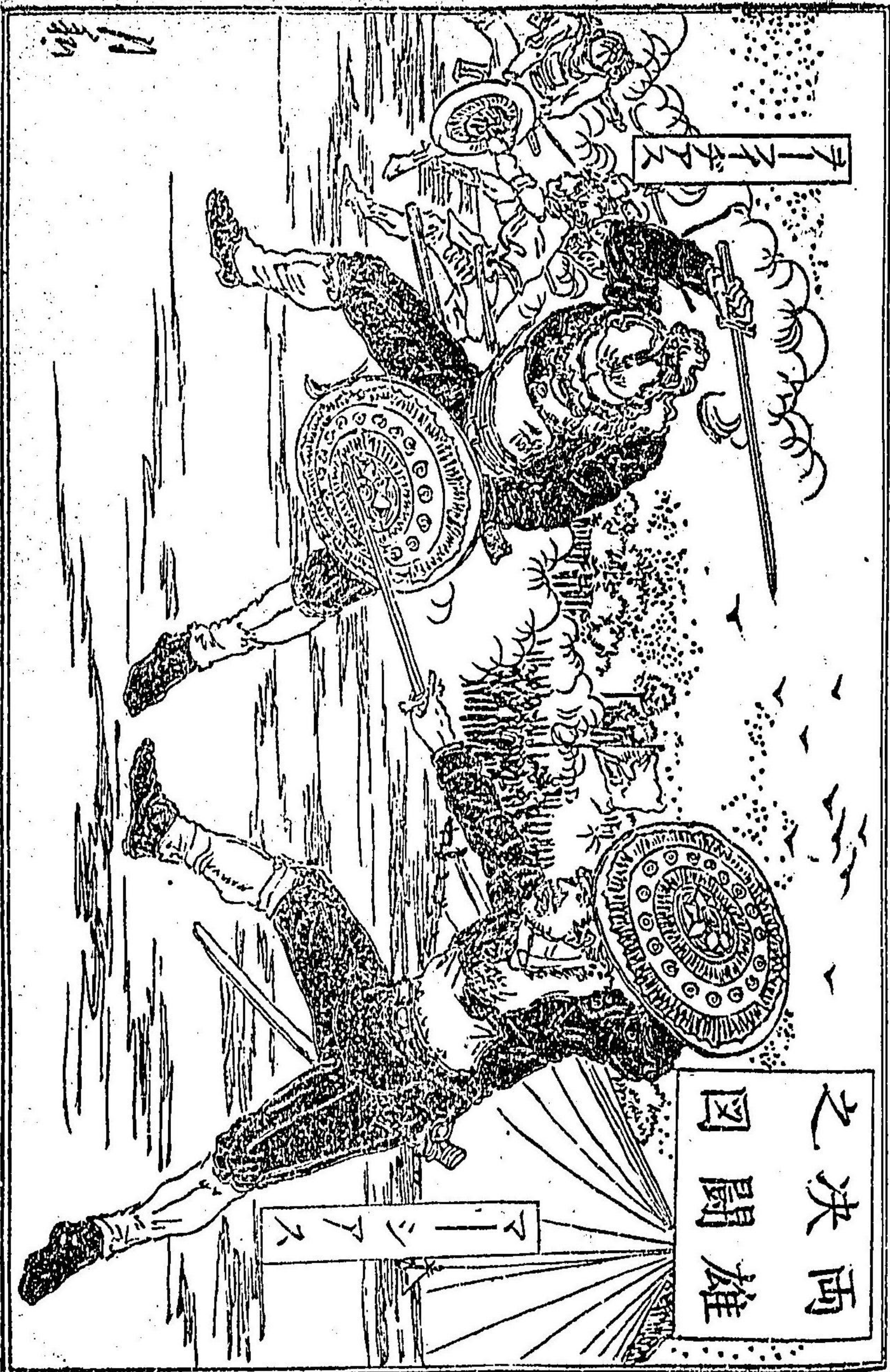
(三人)ハ、ア

ト三人控へる。兩人暫らく立廻わる。ト、塙手士叶はず上手
へ逃む込む馬爾士亞大聲よて

(馬爾士亞) ヤア敵に後を見せるハ卑怯なり。返へせ

ト呼ばわりながら跡を追ふを行ふんとする。三人前を遮り

(三人)やらぬ



馬爾士亞之決闘

ト切てゐる馬爾士亞三人を切り伏せ
(馬爾士亞) ナエ、取逃がしたり残念や

トよろしく在て血刀を拭ふ。あゝにて道具まわる

古美紐士陣營の場

本舞臺陣中の体こゝに着陣の嗽叭と共み右此上手より古
美紐士。左此上手より馬爾士亞各々肩に垂衣を纏ひ兵士を
従へて出て来り。双方禮をさそ

(古美紐士) 誠々天晴なる貴殿の御働某貴殿の勳功を我國議事院
よ報告せば。上議事官此人々始め。下方民に至るまで。貴殿老幼を
しなへて。喜悅の涙を流がす中も。貴殿の働を賞讃し貴殿の武
勇を慕ふこととて御坐るふ。貴殿この度此御働。彼の哥畧於利を
攻め取り召されしは。みても。充分の勳功と申そもの。況んや我
よ力を添へられ。換辨士を追ひ散らし。召されしお於てをや。誠

よ昔今無双の御手柄で御坐たわい

あの処へ茅度出て来る

(茅度) オ、馬爾士亞殿ろれお居らるゝや。貴殿の働感服の外なも

善々共誠は忍入て御坐る。今これを譬ふれば貴殿の馬の働あり

拙者如きの馬は付き添ふ。無用此飾物と申そのので御坐るわい

(馬爾士亞) ア、イヤ。ろは餘まり。舉め過ぎたる御詞。力にさる強弱

の區別あれ。人の命よの差異あらず。さればあの度此勝軍は某一

人の手柄よて候はず。共よ進とし兵士等も皆な某と一機よ死力

を尽して戦ふたればその勳功は某と同然。決して彼是の差別を

し。今のお詞某よ取て。喜ばしく候はず

(古美紐士) イヤ。それは貴殿の御職遜と申その。我羅馬の人たるも

のの貴殿のお働を知らいて何と致るふ。お隠あるは却ておん身

此否ならず。分捕せし財資の。兵士よ配當とるるの以前。先つ貴殿

の嗜好よ任かせせ。十分の一を進上仕らん

(馬爾士亞) その為なし去なぐら。國家危急の其時よ命を捨て、戦

ふは。國民たるも此本務よ。取て舉むるよ是らさること。日頃

某が勇氣を養ひ。刀を研ぎ鎗を磨きしは一身の利を思ふどのこ

どならず皆な國家を守護せん為めなれば。此度如き戦争よ。力を

尽しを戦ふの。職よ某の本意なり。夫れえならず前も某が申を

通り。軍功の該兵士と同等なれば。あの儀の平よ御免を蒙り。只た

兵士等と同等の。配分丈けを。受申さん

ト言ひ放つ。あゝ。居并ぶ該兵士共馬爾士亞く。大將く。と

叫びながら。槍を棄て。帽を取る。古美紐士茅度の。両將も軍

帽を脱と

(古美紐士) されば分捕の品のとは。言はるゝ通り平分致さん。然れ

ども。某不肖ながら。大將の任を帯び。物軍勢を指揮しながら。軍

功吾人、隠なき。貴殿、特殊の賞を與へざる。獨り某の耻此みならず。羅馬全國に耻辱ならん。依而某は貴殿、花鬘を進上致し。哥略於利府が我手に入りし。全く貴殿の力なれば。その名譽とし。府名を形どり。哥略拉那の榮名を贈り申さん。

ト云ふや否や兵士等聲を限りよ

(衆兵) 改亞斯馬爾士亞、哥略拉那。芳名万歳。福壽万歳馬爾士亞軍帽を脱して禮を施し

(馬爾士亞) さしたる功もなき某。名譽ある榮譽を與へらる。誠は忍縮の至りなり。若し某が面色白りせば。亦而此程と知れ申さん。然し斯く迄の御厚情拒む。返て失禮と存ずれば。この榮名を花鬘と共に受致し。以來は吾名に哥略拉那を用ひ申さん。
(吉美紐士) 其の同よて某始也。茲に連なる人々を。誠は満足致て御連る。イヤナ。茅度殿。貴殿は再び哥略於利へ赴われ。哥略於利の

頭立ちたるものを呼び出し。窩爾西人此總代として。羅馬へ行く。縁云ひ聞る。さるべき。某の味方の勝利の事ならず。窩爾西羅馬の安全を維持する爲め。兩國和睦の條約を結ぶべしと。羅馬の議事官に書き送り申さん。

(茅度) 委細承知致て御坐る。然らば直襟罷越さん

ト行かんとする。哥略拉那押止め

(哥略拉那) ロレ。茅度殿暫くお待ち被下。イヤナ。大將今更申上らん

は。甚だ面ぶせなることなれども。爰に一つの請願あり。なんと聞届て。被下るまいか。

(吉美紐士) 御望の儀なれば何なりと。聞き届て參らるべき。其願とは如何なるおとよて候や

(哥略拉那) ろは餘の働よて候はず。某一人よて哥略於利府内へ切り入りし節。咽甚はだ渴きも故いと貧しき。家よ飛び込み主人を

呼んで冷水を求めしに。その者甚だ老實なるものよし。某を待
 遇せんと甚はだ厚く。某も何か取らせ度くの思ひし。何分危
 急の場合故。禮もそこ。立ち出でしが。其後塙勝平士と出逢ひ
 其際後の方は我名を呼ぶものあり。某不審なきよし思ひ。味方
 を振り向き眺めし處。不便や彼の者味方の虜となり嚴しく縛ら
 ちれて居たりし。其行て免れんとは存せし。敵將已
 り近寄り故。又た如何ともするに由なく。不便ながら其儘に打捨
 て。置きたれば未だ縛を免れず。無苦にて居る。御坐るふ。依
 て何卒彼の者の細目を解き。懇々放ち歸へし給へるべし。某の願
 と申すは即ちこの儘にて候
 (古美紐士) ア、殊勝なる請願なる。ういとも安すき事候へ。直
 ちに放ち遣へす。御坐るふ。茅度殿。貴殿より。よく。圖らひ
 下さるべし

(茅度)其儀儘り承知仕て御坐る
 (哥羅拉那)お兩方悉く存ずる
 ト三人よろしを在て慕
 ○三幕目
 三將羅馬府へ凱陣の場
 舞臺一面羅馬府市街の体。まに。麥尼紐士。西齊紐士。不慮多
 上手より出て来る
 (麥尼紐士)某この頃ある。卜者よ。取争の吉凶を。とばせし。今夜は
 必ならず。此報知がある。と申して御坐るわい
 (不慮多)その報知。吉にて候や。又た凶にて候や
 (麥尼紐士)サテその報知は。平民の望み異なる。こと。但し吾國
 の平民共。馬爾士亞殿が勝利を得らる。と。好まざる。こと。なれば
 (西齊紐士)ソイヤ。即ち勝利にて候はん。誠々喜ばしき。事。と。去り

ながら。われ馬爾士亞奴が歸國せば。己の手柄を鼻よるけ。益を傲
慢を極むるは必定。不慮多殿何と困るものてり御坐らぬか
(不慮多)ツレ。其の事拙者も大心痛。善きとがわれれば恐い
とがわら。一利あれば一害あり

(西齊紐士)ア、儼ならぬ浮世で御坐るナア

(麥尼紐士)またしを。無益の練言。止た召され。某も早や聞
き飽で御坐るわい

ト三人宜敷ある。我へ窩流美亞。窩留路利。華列利。花道より出で
来る。二人の民長片側へ退

(麥尼紐士)ヤア貴女の馬爾士亞殿の御母子。何用ありとされへ御
越しあされまぞ

(窩流美亞)ハ。今日伴馬爾士亞。歸府する由も候へば彼れを迎
ふ行かんと存じまじたれど。一度貴方も御相談致してと存じま

志て

(麥尼紐士)ハ。アスリヤ御子息は今日歸府召さるとな

(窩流美亞)如何よと今日歸る由も御坐ります。殊に人並勝れし譽
を受け

麥尼紐士手を合せて天を仰ぎ

(麥尼紐士)ア。我入比多の神よ。誠は貴神の守護を以て。今日味方
の恙なく。吾國も凱施致すとのあ。され偏は貴神の力も因るも
のなり。ア。難在し忝あま

ト窩流美亞の方も向き

何角参たはて御坐る

(窩流美亞)コ。是れを御覽あされませ。妾の元へ一通。又た議事院
へも一通。妻窩留路利へも一通の書面を送りま。志て御坐り升

ト一通の書翰を出だして見せる

惜り貴方のお内へも参りしおと存じ升

(麥尼紐士) 某今晚歸宅致せば。無分りませふが。誠と某へも送られ
まじて御坐ろふり

(窩留路利) 必定お宅へも参て居るで御坐りませふ

(麥尼紐士) 若し書面参り居らば。某此喜悅の上なし。シテ馬爾士
亞服のさの度の凱施は。幾遍目おて候や

(窩流美亞) 伴が花鬘を戴ひて歸りし。今度と共よ合せて四度。古
美紐士様より議事院お参りし書面よきは。敬此大將埃腓士と

渡り合ひ。遂は彼れを追ひ捲くりしとのあと。又た古美紐士様に
いこれ度の手柄を。悉とく伴奴よお譲り被下し。このこととて御
座りませ

(華列利) ホン馬爾士亞様此お手柄は。中を詞に思されませぬ

(麥尼紐士) 馬爾士亞殿此日頃此武勇さもあるべし。さもわらん。今

度馬爾士亞殿が歸られなば。以前お増して威權が付くて御座ろ
ふ

ト故と二人の民長も當てあすつを言ふ。民長變な顔をもる
シテ この度此戦は。どこらへ手傷を負はれて御坐る

(窩流美亞) 先年達爾克因の戦此節。七ヶ所の深手を負ひ。又た其以
前の戦に。廿七ヶ所も蒙りましたが。今度の戦は。左程のこ
ともなく。只だ肩お一ツと。腕に一ツ。又た処々も薄手を負ひしと
此こととて御坐りませ

この時がや。物騒しくなりて。嗚咽此聲聞へる

(麥尼紐士) アレお此嗚咽の聲を聞きなされ
間もあく先に古美紐士。次は哥畧拉那柳。此葉よて飾りたる
花鬘を戴き。美しき軍服にて續づく。次は茅度拉爾。周十八計
の兵士と一人の凱旋儀式施行官を引き連れて出来る

(麥尼紐士)皆々お喜びなされ。あれより來らるゝの古美紐士殿
 (窩流美亞)馬爾士亞と
 (窩留路利)お歸りあされました
 華列利

ト皆々よろしを在て出で迎へる。窩留路利ウロくどそる。こ
 の時古美紐士等の花道よ立止まり

(古美紐士)ア、かく恙なく羅馬へ歸ると

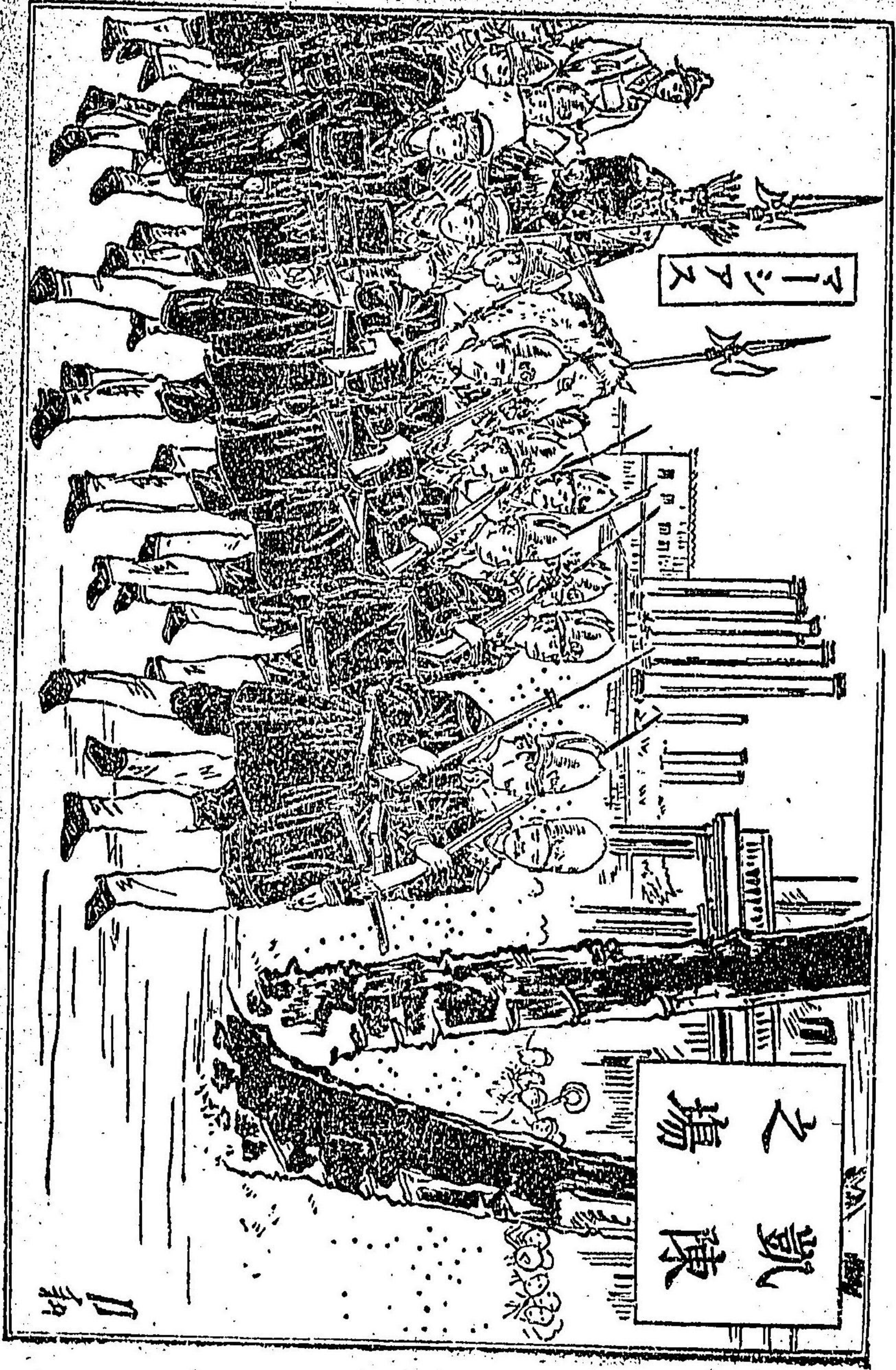
(哥累拉那)是れ皆な神々此御扶助

(茅度)殊更貴殿の御働

(施行官)誠よ感服仕て

(衆兵)御坐り舛る

(施行官)ヤア羅馬の人々よ。あの度副將馬爾士亞殿は。數万人にて
 固めたる。窩爾西此都哥累於利府よ。只一騎打入りて。首尾能くこ
 れを奪ひ取り。又た敵將埃腓士と渡り合ひ。彼を逐ひ捲くられ



る功より。勝利の花髪と諸共。哥畧拉那の尊名を受けられ
たり

ト市人又言ひ觸らす。その時奥まで

(大衆の市人) 羅馬此國威。万歳。哥畧拉那の英名万歳。

哥畧拉那人々最早云ひる。な。某の詞を聞く度毎。心中の苦し

言はん方なし。以來は決して言はる。な

(吉美紐士) 哥畧拉那殿。母上を御覽なされ

ト指さそ

(哥畧拉那) オ、賊と母上様

ト跪まずき

母上様よはされ。あわされまじたか。私出陣のその後。私此無
事幸福を。無神々。祈らせ給ひしならん。其驗より。今日ハ斯

く凱陣致して候

(窩流美亞) ナンノマア此れも及びませふマア立たれじやれ

ト云ながら手を取て立たす

さて此度の花鬘の外に名譽ある哥略拉那とか云ふ榮名を貰

らじしやつたそうか誠と悦ばしいことじやノチこの母も今

日よりのそなたを哥略拉那と呼びませふア目出たいくろ

して嫁女をこゝも居るや

ト後より出たそ窩流路利泣き居る

(哥略拉那) オ、女房もまたで満足く我留守中のさぞや心配致

せしならんナコベソくと泣き居るなこの目出たい時泣くな

れば若し我身武運拙なくして敵の爲たも殺されたどの時はわ

りや笑ふウエ、氣弱い奴じや不吉千万あの度の戦も泣くもの

り。哥略於利人の寡婦の悴の討死したる母親ばうり。人目を辨ま

へぬる。コリヤ涙を拭わぬか

(窩流路利) ハイ妾はモオ嬉ふて。何にも口より出でませぬとぞ

御免さされて被下ませ

ト兩人よろしく在て。哥略拉那母親も向ひ

(哥略拉那) イヤナニ母上様。私のおれより加比多も参り。夫より榮

名を興へられし。貴族の肉を食見舞申し。ソレ宅へ歸るで御坐

りませふ

(窩流美亞) マ、それが宜い

この時窩流路利のウツリ。哥略拉那の顔を眺めて居る

コレ嫁女囁嬉しめらうナフ

窩留路利耻かしがる。哥略拉那と三人顔見合せてよろしく

在る

(古美紐士) 然らば一同。おれより加比多へ参らふては御坐らぬ

(一同)さふ致しませふ

ト妻樂始まり一同列を正だして上手へはいる。斐尼紐士及び女子三人後に續ひて。いゝる二人此民長あどよ殘る。

(不慮多)西齊紐士殿あれ見られよ。皆な哥畧拉那〜馬爾士亞〜と云ひひのやま。子守女のまやべり散らして。子供此泣くよ氣も付けず。くそぼり切れたゆ三まで。痔り墨りと疑ひる。アノマア眞黒な首を出だして。墨たのやし。窓と云ひ物見と云ひ種々さけりた。海面を并べ。商人の店先よのふ。詭弄人形を并べた如く。屋根の上の。活人形の飾をましたと。同然。路傍に居并べる見物人の押合ひ揉ま合ひ衣服の破れるよ氣を注げず。ア、あは年若お娘を御覽なされ。互ひお肌を競ふばかり。誠よ澤山ものでは御坐らぬかほんよ。哥畧拉那の勢は。神か人かど疑ひる。計り。これでは大層な勢おならふて。御坐らぬ。

(西齊紐士)左様〜、これ勢て。諸人が彼を執政よでもするて御坐ろふ

(不慮多)うふなる時の我々の役は彼此勢よ押付けられ。寢入てしまふは必定のこと。ア、困たものじゃ。ナア

(西齊紐士)夫れじやよ由て。何でも平民よ哥畧拉那を悪様よ言ひなし折を見計らつて。益々平民を怒らせなバ。傲慢なる哥畧拉那如何て。黙り居らん。必定平民を罵り嘲るよ相違ない。時の時吾々が平民を煽動して。彼を外國よ放逐せしむる。拙者は上分別と思ふて居りませわい

あの時一人の使者花道より出て来る

(不慮多)何れよりの使者なるぞ
(使者)ハ、ア馬爾士亞様。この度執政官よ登り召さるよ付き御兩所様をこれより。加比多へ御越し被下ませふ

(不慮多)委細承知致し
(使者)

ト花道へ歸へる。兩人は見送り

(不慮多)案に違はず哥畧拉那奴

(西齊紐士)トオ 執政より居るな

(不慮多)何は兎もわれ。是れより加比多へ行き。万事臨機應變を取

り計ひ哥畧拉那の書

(西齊紐士)シイ

ト止める。不慮多小聲になり

(不慮多)害となり。我々の利となる様。油断なく取り行ふて御坐る

ふ

(西齊紐士)然らば一緒

(不慮多)トシ参りませふ

ト兩人宜しくある。よて道具まわる

加比多此場

本舞臺総々集會場の体。爰に二人の小使下手より出て来る

○今日の凱陣して。歸へらしやつと人々が。この加比多へ來らる

、等ア、忙がしいあとで御坐るナア

□サア、早く片付けて仕舞ませふ

ト兩人室内を掃除する

○ヤシ、大ぶん奇麗なれば。少あま休ませふて御坐ら

ぬ

□さふ致ませふ

ト兩人集まる

○時よ今度歸らしやゆた。三人の大將の中で。誰が羅馬の執政官

みあらゆしやるて御坐るふの

□其執政官とならつしやるお方の。十の中九人まで人の馬爾士
 亞様じやと申しますわい
 ○その馬爾士亞様の。大層武勇いお人だそふて御坐るが。聞けば
 傲慢な性質で。平民を惡まじしやるるふなでの御坐坐ぬる
 □あのお方を。惡さま言ふ人はるの機に。傲慢どう何とか申さ
 れまそが。私共の平民に媚び諂らふよりも。余程宜いうと存じま
 そ。馬爾士亞様は平民が惡まふが。そんなおとよ。無頓着
 飽くまで自分の氣性を顯はさるゝの。ソレハモフ。潔白あお方
 で御坐る。い。そしてあの方を惡くて居る人此目から見ると
 あ。の無頓着や潔白だ。却て厭制とか傲慢とかに。見へるので御坐
 りませふ。日
 ○ナルホド。貴殿の仰を一理御坐れど。其無頓着と申すのが。即
 ち平民を輕蔑さつしやる。と申すので御坐るふう

□何はとをわれ馬爾士亞様は。吾國に取てたいした手柄のある
 人故。執政の職に登られても宜いと云ふを。此。あの功もなく。譽も
 なし。只だ平民の機嫌を取。昇級した人とは。月と監雲と泥鷺と
 鳥の相違が御坐るふ
 ○イヤモフ。閉口。い。か。か。も。馬爾士亞殿は。勳功ある人て御坐
 る。貴殿が。褒めな。さる。を。御最。千万。も。ふ。この。話。の。止。た。お。致。老。追。付
 り。あ。れ。へ。來。ら。れ。ま。せ。ふ。程。も。あ。れ。へ。控。か。へ。て。居。ら。ふ。て。は。御。坐。ら
 ぬ。あ
 ト少しツンセして下手へいいる。□印も續ひていいる程あく
 喇叭の聲と。共。愛。へ。一。人。の。小。吏。及。び。職。事。官。表。を。携。さ。へ。花
 道。より。出。て。來。る。續。ひ。て。執。政。古。美。紐。士。次。お。麥。尼。紐。士。次。お。哥
 略。拉。那。外。お。三。人。の。職。事。官。次。に。西。齊。紐。士。不。盧。多。の。兩。民。長。皆
 々。列。正。し。く。花。道。より。出。て。來。り。直。ち。に。本。舞。臺。へ。あ。り。職。事

官は一刻も住み。兩民長の相對して座より

(斐尼紐士)さて窩爾西と此關係は。茅度拉爾周殿を以て。万事取圖らひしむるゑと。なしたれば。一先これにて安心去ながら。今日の集會は。尙ほ一つの大事残り居れり。その餘は儀にて候はず。哥略拉那殿が我羅馬の爲め。死力を盡して働かれたる。勳勞は報酬するの一事なり。就て今日吾國は執政官。又た先日の大將たりし古美紐士殿。改亞斯馬爾士亞。哥略拉那殿が立てられし手柄話をなし。賞ひ度存します

(二人の議事官)○古美紐士殿。何卒此物語をお聞せ被下。假令長き時を費やそと。決して苦しく候はぬ。一ツの残をなくお話し被下たし。某等の貴殿が哥略拉那殿と與へ召されたる賞は存外も輕少と存じますれば。身共等議事官は。この上最上の賞譽を與へ申さん所存で御坐る。また哥略拉那殿の我等が申出

せしものよ。平民共が一致せる様盡力なされたし

(西齊紐士)拙者共の哥略拉那殿の爲め。あれへ呼び出されし御坐るが。貴殿等此御意見と同じく。哥略拉那殿此名譽榮達は飽まで賛成致して御坐る

(不慮多)哥略拉那殿があれまでと違ひ。平民共を親切に取扱ひるゑとあれは。拙者等を始に平民共も。哥略拉那殿の榮達は共に喜ぶ處で御坐る

(斐尼紐士)ア、イヤ それの今日あの席にて彼是議することでは御坐らぬ。斯く各方をお招き申せしは只だ。哥略拉那殿の功勞は報酬致さん爲たて御坐る。哥略拉那殿は日頃より。平民を愛し居らるれば。貴殿方も能くゑを辨まへられ。蔭武者を止たを公平に万事を取圖らひれたきもので御坐る イヤナ、古美紐士殿早やお聞のせ被下よ

日の戦も顯はされたる。功績の千語万言盡そとも。中々言ひ盡く
 するも能はず勇氣崩れし味方の軍兵。將も走り去らんとするを
 勵まし自から。眞先に進んで敵を惱ませ。刀の閃めく度毎に敵を
 斬らずと云ふもなく。自勝ば惣て血汐も染み。流石鍛へし名刀
 も鋸の齒も異ならず。就中只だ一騎もて府内も切り入り。思の儘
 に敵を騒がし難なく。府外に現はれ出で。まゝを惣軍を引き連れ
 て。府内も攻め入り。瞬く隙も乗取られたり。あれ誠も凡人はなし
 得べき處もあらず。又た哥略於利を攻め取らるゝや直ちも廻を
 回らして。吾陣所も駆け付け付られ。數ヶ所の深手も撓みもやらず
 敵の先鋒を突き崩し。塙崩れ士と鋒を削ぐ。遂に彼を退ひ捲くら
 れたり其目覚まきあと言ひん方なく。誠と鬼神の發れたるは
 斯くあるなと思ふ計り。四角八面も切り立て進ぎ立て追ひ
 敵兵も。稻穂の風も靡びくが如く。陣内も敗北なし。遂に味方

の勝利とあり。斯く凱陣致せしなり。これ皆な哥略拉那殿の働で
 御坐る

(麥尼紐士) ア、天晴なる勇士かな

○うく手柄ある哥略拉那殿。假令執政は職を與へ申すとも。尙ほ
 十分とは申されませぬ

(古美紐士) 哥略拉那殿は單に名譽を重じて。更に自身は益を計ら
 れず。その潔白なること。中々凡人は及ぶとある。御坐らぬ

その時哥略拉那上手より出て来る

(麥尼紐士) 哥略拉那。茲に列ある議事官は。貴殿も執政の職を讓ら
 んど皆を一致して御座るが。貴殿の如何思召るゝや

(哥略拉那) その忝なし某いゝでか。拒み申さん某が一身の一生吾
 國に捧ぐ申すべし

(麥尼紐士) その悦ばし去りながら。是より貴殿の平民の。一致を求

と給ひぬばなりませぬぞ

(哥略拉那)その儀の偏^{ひとへ}に御免被下^{おんごん}を如何^{いかん}と云ふ。拙者手傷
 まだ平愈^{ひらこ}仕らず。只だ一枚の垂衣^{たて}を纏^{まと}ひ。公會場^{こうかいじやう}に行きて平民の
 一致を求むるの。到底堪へ難く候へば。何卒この儀式^{ぎしき}は御免被下
 度し

(西齊紐士)イヤそは甚^こいた六ヶ敷^{むつがしき}ことならん。平民共は執政を撰^{せん}
 舉^{きよ}するの權^{けん}を持ち居れば。あの儀式^{ぎしき}は一も變^{かへ}さず。行ふべしと云
 ふに相違^{さうゐ}御坐らぬ

(麥尼紐士)イヤナ。哥略拉那殿。少々計^{はかり}の苦^{くるしみ}は忍耐^{にんたい}なされて習慣^{しやくかん}
 儀式^{ぎしき}を行ひ給ふが貴殿の爲^{ため}とよよろしふ御座るふ

(哥略拉那)さふ言はるれば詮^{せん}方なし。然らば是より公會場へ赴^{むか}き
 と

(不慮多)平民の一致を求めなされ

(西齊紐士)その上よて執政の

(麥尼紐士)職に目出度

(一同)お登り召され

ト皆々よろしく在て慕

○四幕目

哥略拉那館^{あかた}此場

本舞臺座敷此休よろま^まく。庭^{にわ}よさしやうなる泉水^{すゐ}を作り。ろ
 の邊に紅葉^{もみぢ}此立木をなす。但し夜の景^{けい}よと硝子張^{しょうじぢやう}の月出づ
 る。茲^{こゝ}に哥略拉那の母窩^{ぼくわ}流^{りゅう}美亞^{みや}椅子^{いす}にかゝり月を眺め居
 る

上^{うへ}千里^{せんり}を照らす秋の月。光^{ひかり}もいと爽^{さわ}へ渡り木々の梢^{こゝろ}に染^それ出^い
 す。錦^{にしん}の色の泉水^{すゐ}よりうつろう影^{かげ}も子の事^{こと}と。心^{こゝろ}で心態^{しんたい}むる窩^{くわ}流^{りゅう}
 美亞^{みや}の静々^{しやうじやう}と。縁^{えん}側^{かた}近く進^{すす}み出^いて

ト 窩流美亞 縁側へ出でる

(窩流美亞) この楓葉を見るよ付け。思ひ出さるゝ吾子此事幼なりし其頃より。軍馬の椅子に口を暮らし。戈の枕よ夜を明らし霜よ露らされ雨よ沐み。愛き艱難を凌ぎたる。其甲斐空しうらずしを錦を飾ざる時至り。執政官よ撰まれしが。只だ案ずるの今日の首尾ア、平民が承諾それバ宜いがナア

上 折じと開ゆる遠寺の鐘

ト 鐘の音する

上 窩流美亞 耳うば立

われは初更を告ぐる鐘。伴が未だ歸らぬば。首尾能平民此一致此濟み。祝宴此酒お快よく。何れへる宿りし。イヤそれと首尾が悪るかりしか。ア、早く歸れば宜い。ハナア
上 思ひ煩るふ折から。立歸りたる哥略拉那

ト 哥略拉那 じほくとして奥より出で来り

(哥略拉那) 母上様よはあゝにをすするや

(窩流美亞) オ、悴戻らしやつた。あなたの歸が遅故。あ母の心配して居りました。テ 今日首尾の嘸宜うつたであらふ。早々話して開して呉りやれ

上 問はれて尙も迫り来る。怒を擧げよ。握りめ言はんとして。口籠る母を不審晴れやらす

コレ 悴どふしたのじや。早々話して安心させて呉りや

(哥略拉那) エ、母上様残念で御坐ります

上 聞くより母の詰め寄りて

(窩流美亞) 何だ残念此じや。コレ 早く聞かせぬ

上 哥略拉那は椅子よ坐を占め。胸撫て下し

(哥略拉那) 母上様能くお聞き被下。今朝議事官の勸よ任かせ。麥尼

紐士殿と共に公會場へ赴き。懇々平民の一致を求めし。皆な快
 よく一致を表し。執政官となるを評せし故。あの上は議事院へ立
 歸り平民を招待して祝はんと。麥尼紐士殿を伴ひて歸る途次。二
 人の民長出て來り。忙ましく告げて言へる様。先程貴殿へ一致しな
 がら。平民共貴殿を怨み。己へ一揆し。彼處にわれは。是れより先
 へ進むなど聞て。如何よを合點行かず。兎せん角せんと。躊躇ぬ折
 老も向の方より數多の平民。手よく得物を提げて。哥畧拉那を
 殺せよと。喚き叫んで押寄せ。故お癪な奴原目。物見せんと。刀
 の柄も手をあけて。已も扱おんと。なしたるよ。麥尼紐士殿が中へ
 立入り。此場の我も預けよと言はる。詞に是非もなく。無念を忍
 びて立ち歸りて御坐りま。母上様も察し被下。ア、無念く
 上「無念々と計みて。後の詞も夏の日。薨を焦がそ如く。きり聞
 母親のつぐく。と。思案を定め容を改め

(窩流美亞) コレ 悼。さふ無念も思ふも詮なき。あど心を静めて。驚り
 と平民共を宥むる術を考ふるころ。肝要なれ。シテ 悼。今朝平民共
 はそなたへ一致を表しながら。何故わけて即坐し。離反し。あくの
 亂暴も及びたるぞ。其原因なく。て叶いぬ。そなたは心當れ事あ
 る。上「哥畧拉那は腕あまねき。暫し思案を沈みしが。稍をわけて頭を
 蓋か
 (哥畧拉那) 別も心當りていなれども。只だ疑ふ。二人の民長。彼
 等二人の常々より。拙者を惡み嫌ふこと。恰も蛇蝎あ於けるが
 如く。時をあつたら斥ぞ。んと心を痛め居りし。とれこと兼々。聞
 り聞き及べり。されば。あの度某が。執政官となるを忌む。今朝某等
 が公會場より歸り。去後にて。民長二人某を惡機と言ひな。し。平
 民共を煽動。志。必定かく謀り。まよて候はん。これを思へば。民長の

國家此曲者。我身此敵。臨に志て食ふとを中よ飽き足らぬ奴で御坐りませ

(窩流美亞)そなた此言ふ如きなれば。平民共は罪の甚し。只だ恐むべきは二人の民長。今民長を罰するは。いと易きことなから。若し汝れを罪せれば。平民共の怒を激し。益々そなたの爲みならず。固より平民共は。民長を欺かれて。うなたを怨むことなれば。最一度そなたが公會場お赴き。民長共の惡を敷ぞへ。改め。一致を求めなば。平民共を疑附れ。罪を謝し。一致を表さん。うくなる時の民長を。平民共に望を失なひ。うなたの手を煩。さずして自然と除き得らるべし。一時の怒を耐忍して。幾末永き幸福を計る者こそ英雄なれ。私の怨を擅として。國を騒がし身を破らば。野末の狗にも劣るぞや。卑しき者に首を下ぐるも。時取ては耻にわらず。感と思ひ家を思ひ。身の榮達を願ふあら。明日公會場に赴きて。民

長共の讒を訴へ再び一致を求めなさい

上「哥拉那那の耳も掛けず

(哥拉那那) イエ、假令諸民の怨を受け。車裂の刑に処せらるも。千尋の巖も抉がるども。皮を剥き骨を削らるゝと。余人は知らず。某は身の榮達を願み。身分卑しき平民原も頭を下げて阿容く。と。再び一致を願むなぞとい。毛頭思ひぬことにて御坐りませ

上「詞せわしく言ひ放なせば。窩流美亞は打點頭き

(窩流美亞)うちの言やることは。一應尤も聞ゆれど。夫れは余り短氣と云ふもの。そなたが少し耐忍して。平民共の機嫌を取さへ。それば執政此職は。うなたの掌に落ちるのじや。首尾能執政官となり。う上のうなるの氣儘おなると云ふもの。寶の山も登りて空しく歸るのも。寶玉を得て歸るは。皆なそなたの心一つ。世の中

事々は心の儘に行かぬものじや。茲此道理を咬みめて少し
いろなたの氣質を曲な。平民此意に従ぬが。國の安全身の利益一
擧兩得の筈でないか

(哥略拉那) イエ、どふ仰つてもこの事はうりは

(哥略拉那) 不承知か、困たものじや ナア

上「暫し詞もべ切りし。襪をろけと押開き。議事官後よ伴なひて。出

て來りたる麥尼紐士

ト麥尼紐士二人此議事官を伴ひて與より出て來る

上「見るより二人は不審顔

(哥略拉那) ヤア貴殿は麥尼紐士殿の真夜中よ訪はれし、

(窩流美亞) 嚙子細が在ることにて御坐りませふ。何は兎をあれ、

あれ、

(哥略拉那) 通り被下

ト椅子を差出す

(麥尼紐士) 御免被下

上「御免々々麥尼紐士。差出す椅子よ腰打ち。衣紋を繕くろひ詞
を收也

(麥尼紐士) 斯く深夜よ伺ひまゐ。餘の儘よて候はず。今朝貴殿と公
會場おて別れしより。一揆したる平民原を立去らした。モッ安心
と歸る途中。再び數多の平民よ出逢ひしかば。某道先よ立ち塞が
り。是より何れへ押寄すやと聞きし處。皆な口々よ。哥略拉那の宅
を襲ふ爲めなりと答へしうば。その大變と某種々平民を説得し
明日貴殿を公會場よ伴なひ行き。汝等の前よて質を故一先こゝ
を退けよと。再三再四言ひ聞かせしよ。平民共も承知なし。ソブと
ろ此場を退散せり。されば是非貴殿よは。明朝某と諸共ふ公
會場よ赴かれよ。さなきとき。無謀の平民如何なることをなと

やも知れず。貴殿を嘸御不承知又は候まじ
(哥畧拉那) 某か歸りし後より。平民共ハ再び一揆し。此家敷
に押寄せんと致せしと。な。恐き平民共が動舉る。な。さふ聞上は
尙更のよと。假令狗猫頭を下ぐるとも。平民原は見ると思し
きこと。て御坐る

(麥尼紐士) スリヤ 御不承知と。な。コノ哥畧拉那殿の餘まり我
強いと申すもの。取るに足らぬ奴原なれど。即今の場合なれば少
し。忍び難き處を忍び。明日再び公會場へ赴きて。懇一一致を求
め召さる。おそ。御身又取て万全此計ならん
(二人の議事官) △麥尼紐士も。平民共に約束をしられ。志あるとなれ
ば。今更迷約を出來難し。殊更貴殿の爲なれば。是非とも明日は公
會場へ赴かれよ
(高流美亞) エ、コノ 悴どふしたるものじや。お兩方とも。の。辨よ。

と恐なる御説得。少しは胸は落付きまし。と。あ
(哥畧拉那) 某は今胸騒が。老く。皆々様の云われしこと。一向耳より
い。おせぬが。一体麥尼紐士殿の御意見は。なんと申すので御坐
る

(麥尼紐士) サレバサ先も申せし如く。一日の怒を忍び。明日再
び某と共に。公會場へ赴かれよと申すので御坐る
(哥畧拉那) シテ如何致すので御坐るや
(麥尼紐士) 貴殿が今御申されし言を。平民此前よて云ひ直し。改め
て一致をお求め。おされ
(哥畧拉那) スリヤ 平民共よ
(麥尼紐士) いうみを頭を下げ。丁寧よ
(哥畧拉那) 某は生てより。一度唇より出だせ。言は。神々に。そら一
言を。云ひ直したる。おとは御坐らぬ。夫れは。何ぞや。ア。おむさぶる

しい取るに足らぬ平民原よ。頭を下かて恐れ入り。詞を改むる
詔ふなどい其夢にも見ぬあどて御坐るまい

(窩流美亞) それの餘り剛情と云ふもの。成る程貴族と云ひる、身
が先此詞を改むて身分卑しき平民原よ。託あやまりをそると云
ふは、見事なあどていなければども。切迫つまりし當座の難儀。今ま
ろむたが。平民原よ一致を頼む。即ち一寸の名譽を捨て、一
尺の名譽を削ると云ふもの決して耻づべきあど非ず。目前の
耻を得忍ばずして。一生の計を誤るころ政治を執る貴族あり。誠
又耻づべきことならずや。サアあゝ心付いゝなら。斐尼紐士
様のお詞に従ひ公會場へ行てたを

上「真藥お優る老母此諫言の却て口よ苦きを覺へ。哥畧拉那は座
を離なれ。拳を握り眉を逆立て

(哥畧拉那) 母よは何故あつて。よく根強く云はるゝや

上「いままき問へば母親は。怒らせまじと片頬よ笑と

(窩流美亞) 真藥の口よ苦けれど。あれを服すれば命を全ふし。諫言
は耳に逆らへど。あれを納むれば國家を保つとは。政事を執る人
の口づさき。それにろなたの腹を立。語氣顔色を變ずるとは。執
政官せもなる身お取て。ふさばしめらぬことならずや
上「たしななたられて退にを。他人は手前耻ひけん。哥畧拉那は。しふ
と。と元の座よ就き腕こまぬき。只だ黙然たる計なり母は見
るより夫れと察し

(窩流美亞) これ悴分たう。わうつされば怒を静む。母の云ふとを能
く聞きやそなたの腕力を用ゆる分とを首を下げて平民共よ一
致を頼まぬと。エライ剛情よ云はるれど。ア能く考がへて見る
が宜い譬へは。戦場よて敵の城を取るときも。家を壊ち人を傷け
てあれを取るより。口先よて敵を諭し。鋒お血塗らずしてろ此

城を取る方國の爲に家此爲に幾倍よきか計り難し。さればぞ
 なたが平民を口先みて慰れ。首尾能執政官となるときハ。則ち
 録を用みずし。敵城を降したるお異ならず何のハ名譽を汚
 がしませふぞ。夫れに何ぞや只だ一圖。力づくめて取らふどの
 年々行きぬ。小供の最見身分卑しひ平民原に腰を屈がえて頼
 ひと思へばある。思々敷と思はるれ國の安全身此榮達を計る
 一の手段と思へば。誠に入用のおとてハ。いハ分たか悴
 分されば早く麥尼紐士様の御意に従はぬハ
 (麥尼紐士) ア、男子と及ばぬそのお詞。イヤナ。哥畧拉那殿明日
 吾々と同道致され。平民原が怒を静める様。丁寧に説き聞めされ
 なば目前の危難を取り拂ふのミウあれまで。平民が貴族を悪
 思ひ居る心根も。プツハリと断ゆるてハ御坐らぬか
 (窩流美亞) どふぞ今一度。おの方々と一緒に行きたも。又た平民共

の居る所へ行とら。このよふハ帽子を脱て手と提げ。土の上お跪
 まづきやれよ。兎角愚民と云ふも此は耳よりと目の方が。一層力
 のあるものなれば。詞の使ひよふよりも。身体の体裁と氣を付け
 ぬばなりませぬ。こふして頭を屈むれば。最も謙遜此体を示しま
 すぞや。ろして平民共と向て云ふハ。私はお前方の兵士なれど
 幼少より刃の中に日を送くり。此ハ雅致風韻を辨まへざれば。各
 々方のお氣と障りしおともあつたて御坐りませふぞ。この後ハ
 堪てお前方のお氣と入るよふハ致す故。何卒おれ迄此罪を赦さ
 れ快く一致なし被下よ。物柔かと言ふがよいぞ。オ麥尼紐士
 様さふては御坐りませぬ。但しおハの処窩流美亞手眞似をし
 (麥尼紐士) 如何おとさよう。諸否の權ハ平民共とあること故
 是非どもがくなされぬばなりませぬ
 (窩流美亞) さようて御坐りますとと悴どうぞ行てたをハ

この時奥より古美紐士出て来る
(窩流美亞) ヤア 貴方は古美紐士様 マア く 立ちらへお通りなされませ

ト椅子を差し出と。古美紐士腰をうける

(古美紐士)拙者今夜市街を見廻り候ひしよ。平民共の暴助言語は
尽し難し。哥略拉那殿公會場へ赴あるゝるの時は。數多此護衛兵
を引連れて。充分な備をなされねばなりませんぞ

(斐尼紐士)イヤ うれふに及びませぬ。只だ哥略拉那殿か和かに諭
し召されば鎮まるて御坐りませふ

(窩流美亞)イヤモフ どふ在ても和らかませねばなりません。怪も
あの場合なれば。さぞや物和らうとするて御坐りませふ ナニ哥
略拉士どふぞ母の詞又従ふと。たつた一言云ふてたもい ノフ

(斐尼紐士) サア 哥略拉那殿如何で御坐る

(古美紐士)お厭止召されての分かり申さず
△早々返答

(三人)お聞かせ被下

ト「右左より迫まられて。哥畧拉那も詮方なく。心と共な形を改た
め

(哥畧拉那) スリヤ どふあつても。平民原は頭を下。心もむらぬ
追従輕薄を言ねばなりません。是れを是非がない エ、よろ
きふに坐りませ。某方々の仰ふ従ひ公會場へ赴きて。平民共一
致を頼むて傍坐りませふ。ア、某生れ落ちるより。只此一度を頭
を下。詫びあやまりしおとなき。下腹の平民原に腰をうけめ
地に跪きて頭を下ぐるとい。ア、口惜ども。無念ども。母上様。方々
某の心中を察し被下

上「おと言ひるし。口籠もり一滴落とそ血の涙。母親始と有合ふ

人々顔見合せて黙然たり

上 古美紐士空打眺

(古美紐士) ヤア最早明くるよ間をなしく。各々方直様参るふてははらぬか

(麥尼紐士) ナ 明くるよ間をなしく。然らば是れより

(哥畧拉那) 公會場へ参るて御坐るふ

(窩流美亞) ろれてこの母も大安心。悴必らず共々氣を付けて首尾よ望を達するが宜いぞ

(哥畧拉那) 母上様御心配なされますな。拙者これより公會場へ赴き。充分平民共此歡心を買ひ。屹度執政官となりてお目よかけ申さん。母上様この由女房もお傳へ下され。イザ山立仕らん

(窩流美亞) サラバよろしく頼むぞや。各々様おを

(一同) 御免下され

ト宜敷わつて窩流美亞は奥へはいる。哥畧拉那立上らんとそ

(吉美紐士) コレ暫くお待ち召され。兼て民長共の貴殿を惡む時

あれはと思ひ居る由は候へば返すくも注意して

△巧の畏は懸りらぬよふ

(麥尼紐士) お頼み申す。哥畧拉那殿

(哥畧拉那) 必ならず御心配被下な。サア各方御同道仕らんと

トみなくよろしくおめて。道具まいる

公會場此場
本舞臺総べて集會場此休。爰は西齊紐士。不慮多の兩民長花道より出で来る

(西齊紐士) なんてと今日ば哥畧拉那は激しく惡口雜言し。彼奴傲

慢な心を押へること能はずし。我々共に粗暴な行をするよふにしきやらぬはならぬ。若し又それをも忍耐するの時、彼奴は平民を悪くむ奴じやと言ひ張つて飽くまで根強く咎め付け。是非とも堪らへ切れぬよふ甘まを持ちりてやるで坐るふ

(不慮多)と云ふもの、彼奴もさる者

(西齊紐士)ニ、餘計な心配は無用くソレハ、そうと早やこへ

来そふなものをじやよ

この処へ一人の副民長花道より出て来る。双方禮をなと

(不慮多)哥畧拉那のあれへ参る様子で坐るか

(副民長)彼の既又自宅を立ち出で、坐ります

(不慮多)シテ、此連は誰で坐るぞ

(副民長)老人麥尼紐士。及び兼々哥畧拉那の肩を持つ。數人の談事

官共で御坐る

(西齊紐士)然らば貴殿は直様あへ大勢此人々をお呼び被下又た若し拙者が哥畧拉那に向ひ。平民の權利威力を以て。或は死刑。或は罰金。また放逐の刑と處ると言渡したる其時。群集せる人々もこれ又賛成する様。御盡力被下度し

(副民長)承知仕て御坐ります。由大勢此者共。篤と言ひ合く

坐るで坐りませふ

(不慮多)若し又々群集したる人々。一同又叶ひ始めたる時は必ならずこれを制止せらるゝな。成るべく勢に乗じて腕力よ訴ふる様。無暗に人民を煽てられよ

(副民長)畏て御坐りませ

ト花道へ歸へる

(不慮多)コレデ、今も哥畧拉那来りなば。思ふ存分嘲弄

なし。直様彼を怒らせ呉れん

(西齊紐士) 誠み心地よきこととて御坐るナア

このとき哥畧拉那垂衣を肩上よ纏ひ。麥尼紐士。古美紐士及び四人計の職事官を伴ひ花道より出て来る

(西齊紐士) アレ見られよ不慮多殿

(不慮多) 誠とツロくど來をつたな

ト云ふ内花道の一列舞臺へかゝる

(麥尼紐士) 某等罷てお両方よお願ひ申を

ト哥畧拉那を目よて促がそ。哥畧拉那屹と決心したる顔色よて。兩民長よ禮をなし

(畧哥拉那) 仮令某は如何なる汚辱を蒙むるども。更にお二方をも平民をを怨と申さず

あの処へ副民長十人計の平民を伴なへて花道より出て來

る

(西齊紐士) 皆凡人々これへ進まれよ

(平民共) ハア、

ト近と進む哥畧拉士頭を下ゆ

(哥畧拉那) 先づ某が申をことをお聞き被下

(民長) よろしく。お話なされ

(哥畧拉那) 某よ對しての非難責罰。お惚べてこの処よて御決定被下りよふや

(西齊紐士) 若し貴殿が平民此權力に服し。貴殿の上よ科する罰を受らるゝなら。我等數多の平民になり代り。この処よて決定致して御坐るふ

(哥畧拉那) 貴殿方の言はるゝとは。何よても某承知致すて御坐りませふ

(斐尼紐士)大勢の市人よ哥畧拉那殿へ。アレめの通り頭を下から
ろち達も爵を受けると申居らるゝぞ。だが皆々能考へて見よ。哥
畧拉那殿は今日まで。命を惜まらず妻子を顧みず。其方達の楯とな
りて。矢石の中も馳驅せられ。その勳功擧て數ふるお進まわら
實に吾國の柱石と云ふ人じや。また軍師にのみ身を委ねられし
故。その首行いと荒々しく。尋常の人と異なれば其詞を聞き其行
を見るろち達も。何か悪さまお思はるれども。哥畧拉那殿も限
りては更も野心を抱ひて御坐らぬぞ

(古美紐士)貴殿のモウられよて澤山。サヤとの次は

ト哥畧拉那の袖をひく。哥畧拉那詮方なき顔よて

(哥畧拉那)皆々方が。前よは某の執政官となるを賛成せられ。其後
直横おれを拒まれしも。全く拙者が言行の暴きよ依るも此と。某
大も後悔致しよ御坐りませ

ト荒々しき言氣を隠くしよいと和らうに云ふ

(西齊紐士)イヤ、吾々が咎むるの。そんな小さき事では御坐ら

ぬ貴殿はおれまで永の間。羅馬人民固有此權力を。不正な方法よ
て奪ひ取らんと企てられり。これ我國民此爲めよは大叛逆と
申そもの。我等が咎むるは則ちこゝで御坐るわい

哥畧拉那思ひ切たる顔色おて。詞も地木を顔はしていと暴
々しく

(哥畧拉那)ナニスリヤ某を

(西齊紐士)いりよも羅馬國の大反逆人

(不慮多)我國民の大敵で御坐る

(哥畧拉那)エ、モフ堪忍が出来ぬ

ト怒の休よろしくある

(斐尼紐士)哥畧拉那殿和らめよ。こゝが堪忍れまごころで御

坐るぞ

(古美紐士) コレ貴殿の約束では坐らぬか

(哥畧拉那) モフ堪忍を約束も。吾胸の中より去て御坐る。ヤイ毒惡

民長奴をのれり。ア能くも數万の愚民を瞞若し我を陥れんと

計り居つたナ

(西齊紐多) 大勢の人々あの愚口を開かれたる

(平民共) 多伯安の丘此上より突き墜して殺してしまへ

(西齊紐士) モフ外此事は責むるに及ばぬ。各方の見聞せられし通

り各々方より推舉せられし吾々を罵り。刺さへ吟味を受くるを

拒むからよの早や。モフ我國の大罪人。最も重き死刑を致さべき

奴で坐る

(不慮多) どの言へ彼も羅馬の隨分手柄を立てた奴

(斐尼紐士) 哥畧拉那殿。今日母上も約束致されしを。お忘れ召され

坐る

(哥畧拉那) イヤモフ某の何も存じませぬ。ヤイろこな婢奴等我

を多伯安の丘より落すども。又た外國へ放逐するども。生ながら

皮を剥ぎ取るとも餓死の刑も行ふども。うぬ等の勝手な任せて

呉れん。水責火責はまた恐る。八裂の刑も処せらるゝども。ナニ

ぬ等如きよ一言でも。媚び諂ふる我あらんや

(西齊紐士) 退剛情者よく云た。されば我れ羅馬に人民を代り。又

民長の權威を以て。汝を國外追放の刑も処せん。全休死刑も処す

る奴なれども。少し國よの盡しさることを。命丈けの助け

呉るゝが。以來の我國の土を陥むる。サア早く立退りぬ

(平民共) 追放くく。早く追拂らへくく

(古美紐士) イヤコレ民長方。某が申すことと。お聞き被下

(西齊紐士) 哥畧拉那は。早や宣告致され居れば。そいや何も聞くあ

どの御坐らぬ

(不慮多)哥略拉那は人民又た國家の反逆人故。追放の刑も処して
御坐る。貴殿方向が御異存が御坐るのり

(平民共)異存が在るか

(哥略拉那) コリヤ 平民共能く聞け。一犬虚を吠ゆれば万犬實を告
ぐるどりや。誠とうぬ等の兩人の民長共お瞞着せられ。國の干城
となるべき某を。追放罪も処する馬鹿ものめ。うぬ等が指圖を待
つ迄もなく吾れ方より國を去らん。こんな奴は見るも目れ毒心
の汚りく潔よく立ち去らん。羅馬ばかりが吾國ならず。六尺の身
体を容るゝとあるはどこも限らず吾國なり

ト去らんとする

(古美紐士) スリヤ 貴殿の短氣と申すもの

(麥尼紐士) 吾々よろしく計るふ故

(兩人) マア暫くお待ちなされ

ト前より塞がりを止むる

(哥略拉那) ア、イヤ 某の國の罪人。お止たおさると貴殿方の身の
上あ

(兩人) エ、

(哥略拉那) サアお両方よまで及びませふぞ

ト止むる二人をふりきつて花道さしてのいる。二人を詮方な
く四人の職事官を供ない續ひてはいる

(副民長) 吾々の敵が行きをつた

(平民共) アレ、しほくと行きをる

(西齊紐士) 皆なこれより府門へ赴むき。彼が出立を見物致し飽く
まで悪口ゆいて遣るふでは御坐らぬ

(不慮多) それがよろしう御坐らぬ

(平民共) サア く 参りませふ く く

ト副民長を始め平民共花道へいいる

(不慮多) 西齊紐士殿

(西齊紐士) 不慮多殿

(不慮多) マンマと首尾能

(西齊紐士) これて安心

ト花道此方を眺ぐた

ア 皆々の早や行たては御坐らぬう

(不慮多) サア 吾々も参りませう

トよろしくあつて花道へいいる。さゝみて道具まいる

羅馬府門前哥略拉那分袖の場

舞臺の正面に羅馬府門を見せる。門此側より大なる枯木の立

木。其他門前此体よろま

上 館の雨。又此霜も暴らされて。葉色日度爛燦と。高嶺も茂る紅

楓と今朝の嵐も吹き落とされ。昨日此館より引かへて。肌寒むけ

くしよんぼりど。府門を出てし哥略拉那

ト哥略拉那旅装束して門の奥より出て来る。窩流美亞。窩留路

利及び子馬爾士亞。古美紐士。麥尼紐士。外も三人此職事官續

ひて出て来る

上 悄然とまて後見あへり

(哥略拉那) 各々方々に。これまでお送り被下。御厚志の段千万忝な

し。イヤナニ 母上様。先頃の御教訓も従ひ。日頃の氣質を取り違

へ頭を下す詞を低めして頼まじ。姦惡無法な民長共。平民原を

瞞着なし。根もなきことにかまひけて。我を反逆どが國賊とあ言

語又絶へし。此所業。決して母上様此御教訓を。遺忘せしにはあ

らされど。何とあれが黙止て居られませふ。遂も日頃の氣質を顯

はし。つまる処い今日此首尾。お年寄られしの上よ。御苦勞かけ
る不孝の段。何卒お赦し被下ませ

上「免し給まへど手を合せ。拜ぐむ子よりを拜まるゝ。母の心は四

苦八苦。何と詞も涙川。これが親子の別あど。思へばいと、堪へ

兼ねる心で心を取直し。堰き来る涙押拭ひ

(窩流美亞) 誠やな人間万事燃る繩此如く。樂極まれの災となり。苦

變じて幸となる。これ天の理よしして人力の及ぶとあるならず。さ

れば今日の災も。そなたの過失とば云ひながら。これまた天運の

循環よしして。敢て免れ得ざる処。今より嘆あつも詮方なし。又た

あ母や妻子のことは。決して心配するに及ばぬ。只だそなたの

身の振り方。随分共よ

上「願ます詞と涙の下。後は得云はずさしうりむく。窩留路利の涙
を拂らひ

(窩流路利) 願まりと云へば無法な民長。假令罪咎あるよをせよ

武士たるものが平民よ。頭をたゝいて誤まれば。うれてモフ堪忍

しと宜いものを。叛逆人と云ひ立てゝ。追放するとは人非人

上「ほんに昨夜の夢見よと。目出度役お就き給ひ家内打寄り樂も

し。宴せしと思ひしは。今日此しらせり情ない。壽祝ふ所の酒

は親子夫婦の中を裂く。白刃よ等としき別の盃。

ア、どふしたら宜うらふ

上「大地へ蹠踏と身を打ち付け。前後正体なき沈たば玩是なくく

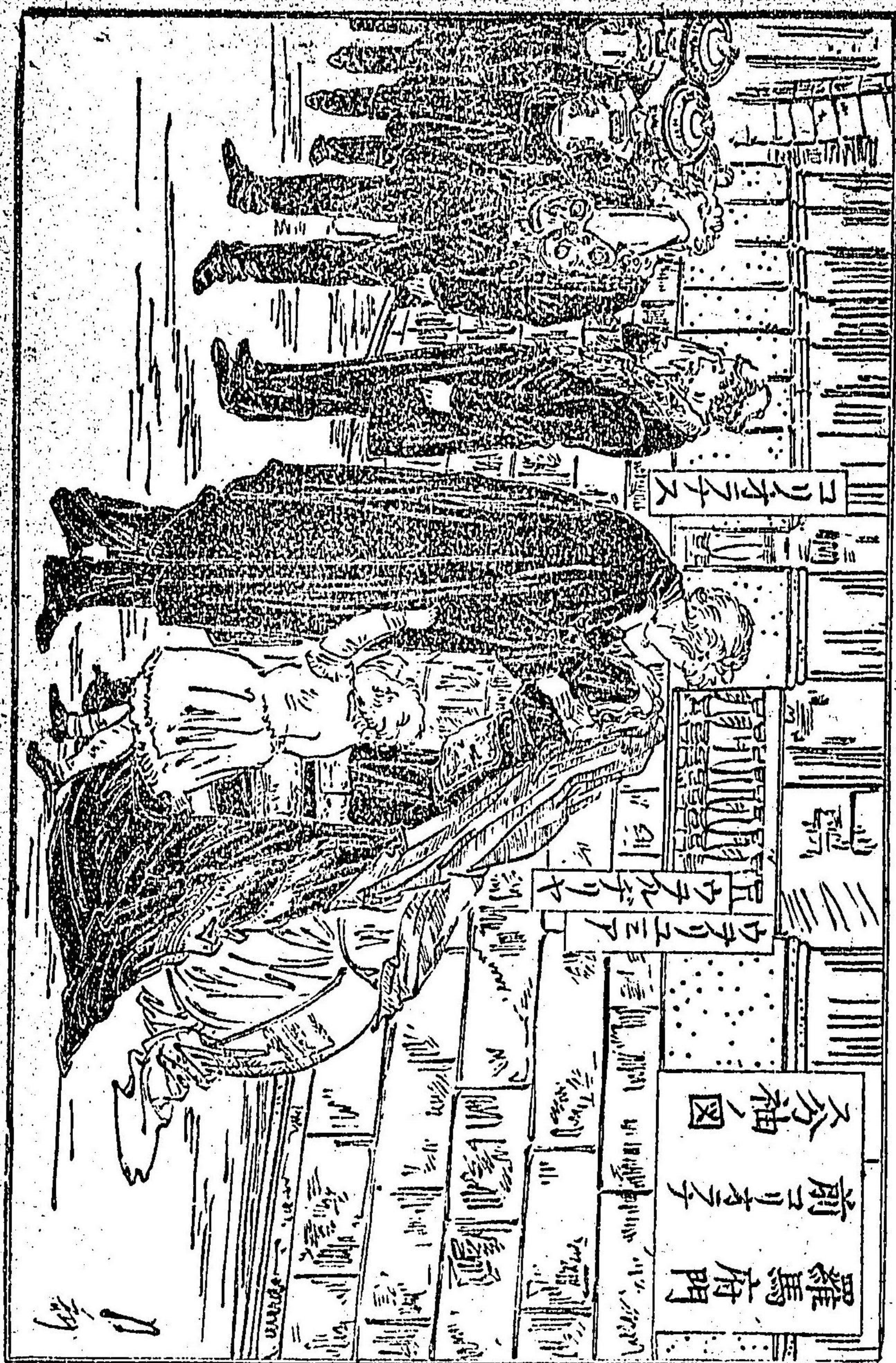
幼子の。父親の前よをろく。聲

(子)とよま。さまのあはよふよ。泣て居られまど。早やくか、

さまが泣るれぬよふ。しと上かて被下ませ

上「聞くより母の彌増る。不憫さつらさ遣る瀬なく。わつと計りよ
泣き立る。涙は秋の村時雨。憐さ添ふる如くなり。哥畧拉那の目

よ浮む。涙見せじと咳よまきらせ
 (哥魯拉那) コレ女房嘆くまい。狡兎盡きて弓矢藏よをさまる
 の儘ならぬ浮世の常。吾とて木石あらされば。お年寄られし母
 上や。二人どもなき妻や子を。馴れ老故郷と諸共よ。後になり捨て
 旅立つは。肉を削ぎ骨を裂かる。よ。何得苦さを覺ゆれども。嘆
 て歸へらぬ今日の成行。過世の因果とあきらめ。たより少あ
 母上やまだ辨へなき稚子を。吾に代りて戀よ。とふぞ養育して呉
 りやれ。コレ女房とふしたまのじや。そなたを武士此妻ていな
 か
 上「云ふとせつなき胸の中。妻のやうく頭を上
 (窩留路利)今仰しやつらうのお詞
 上「更よ傍無理と思はぬぞ。柱とも頼みたる。大事な夫の身は上
 よ降りかゝりたるおの涙



三世契きりしろの妻夕どふア泣かづも居られませふ

上 假ろめの放だも。主じの留守の物憂きよ。何日と定めぬ長れ

旅。叶ぬ願ふ待れども。只だあの上の慈悲よ。妻も一緒よ

連れてたべ。虎伏そ深山風暴らき。野邊も更々眠ひませぬ拜む

く。と手を合せ。泣き嘆つあろいちらしき。哥零拉那は聲はか

ませ

(哥零拉那) ヤア。聞えたるの悪るい女房かな。吾若しそなたを引き連

れなば。後よ残りし母人や。子供を誰が養ふぞや。まだ夫のまがみ

の己が。女房の愛よひかされて。女々しくも連れて立退きしと。世

の人々よ笑えれん。あ此期よ臨ませろ。く。と。後先思ひぬ未練此

線。言少しは人目を憚らぬか

上 口にい云へど心にい。千万無量の血の涙。睨む目元に置く露の

妻戀ふ鹿のゐた身ぞと。云ふに云はれぬ愛別離。昔。在合ふ人々

顔と顔。見合と度。雨催ひ。降らんとしてはまた晴る。諸行常
なき秋の空。西端よ沈む夕陽の。我身の上と哥畧拉那。知るや知
らずや氣を取り直ほし

(哥畧拉那) 日と早や西よ傾むけば。吾を旅路よ取りあらん。コ
母上。日頃の沙氣性は消へました。古美紐士殿もお泣きなさる
な。斐尼紐士殿も涙をふき給まへ。女房。吾國を離るゝとも決
して愛ふるゑどいな。この子を頼む

上云ひ捨て。行あんとすれば母親の。暫しぐ程を顔見たさ片手
よ袂片手よ。漣なす涙押さ拭ひ

哥畧拉那二足三足行きかける。窩流美亞袂にそぐる

(窩流美亞) コレ。悴。ろなたのあれより何國よ行くぞ。母の爲めに
大切な。この身はどこへ落付けるぞ

上問ひれて何と云ふ由もなき顔くして母に向ひ

(哥畧拉那) 母上様。その儀は御心配なされまそな。私
落ち付く処の。ア、ア、ア、ア、

上後云ひおけて口籠る

ト云ひつまることよろしくある

上古美紐士は側にそり寄り

(古美紐士) ナント。哥畧拉那殿。某御同道仕り。及はずながら力
なり申さん。又た貴殿の行先知れ居らば。互に便利よろしあらん

(窩流美亞) ア、それ。悴。暫志の間御同道をお願ひ申せ
上涙ながらよ勸むれば。哥畧拉那押し止め

(哥畧拉那) イエ。年柄の古美紐士殿。決して夫れよ及びませ
ぬ。吾を一個の男子なれば。路傍よ掛るゝとは御坐るまい

母上様。随分違者で。女房さらば。御縁をわらば各々方
上二足三足行きりくれれば。我夫のふ父様と。右左より妻と子が

支ゆる手先見合を顔。遠が勇氣の健雄も。妻子の継も母だされ
て思はず後へたぢく。く。順まづく石に氣を取り直得し。母
よ引りる。後髪。プツ、と切て出で、行く

ト哥略拉那別を惜むるとよろしく在て。花道さしてはいる。皆
々もまたよろしくある

上「あ」と見送りて母親のいどい玉なす涙をのらひ

(窩流美亞)見れば思もへば情ない。昨日は錦繡も纏れて。金銀玉樓
よ住みし身が

(窩留路利)今日は寒むけきやつれ衣。何処を住家と定めなき旅の
空行く離雲

(古美紐士)盛者必衰。會者定離
(麥尼紐士)どの云へ憾めしき

(一回)なり行きじや ナア

ト皆々よろしくあつて幕

○五幕目

安地亞府 埃腓丟士 邸前の場

舞臺総て邸前の体よて。斜た門を見せる。但し夜の景

あゝよ哥略拉那覆面よて。顔を包ましほく。どして花道よ
り出で来る。但し哥略拉那の衣服等旅よやつれたる体よろ

(哥略拉那)あゝ窩爾西の都會安地亞なるの思ひ返へせばこの
都あそ。我爲めよ命を落とせし者共。寡婦孤兒が住む所。是非な

きあど。言ひながら。只た一人よあの内よ。足踏みなとどは。
リヤマア 不思議なことじや ナア

トよろしく思入れある。この所へ一人の市民下の手より出で
来る。哥略拉那呼び止どめ

(哥略拉那)ア、コレ 市人。失禮ながら尋ねずさん

(市人) ム、フ呼び止めしやめた

(哥客拉那) いかよも私

ト覆面を脱ぐ

(市人) シテ何を尋ねさつしやるのじや

(哥客拉那) 余の儀で御坐らぬダ。エ、大將奥膳士殿のこの頃

この都にゐてなされまそか

(市人) ハア大將様へ。あの頃こゝよゐいでじやダ。今夜は屋敷な

て貴族様を招待せらるゝとのあと

(哥客拉那) シテこれ屋敷は

(市人) ソレハソレおれ大きな屋敷じやわいのふ

(哥客拉那) うれは千万忝なし

市人下手へはいる

(哥客拉那) 昨日の淵の今日此瀬と。世の成行は種々様々。吾今赤手

よて強敵の中よ至るの。夏虫此火を轟ふよ異ならず。今暫しが生
死此境運弱ければ刃の霜とならんのみ。若し又た武運尽きざる
その時の少こし此はつみに是迄の積とし遺恨を取り除き。敵の
人々よ用ゐられ。首尾よく羅馬よ押寄せて。平民原よ怨を復せ
んア、薄氷を歩むどの。吾身の上のあとなるべし

トしばらく思入つて

去りながら虎穴よ入らざるそ此時の。虎子を捕ふる便もなま。我

れ羅馬の民長や。平民原を始とし。全貴族で有りながら。我の追放

を外方よ見し。卑怯浮薄な奴原よ。復讐せんと思へども。吾一人は

力よての。目覚ましきあども出来難し。この安地亞ハ羅馬此敵な

れば。彼に助力を頼むの外なし。何の兎もなれ角をあれ。大將奥膳

士に對面せん。彼若し我を殺すと云は。我れ尋常に死ふ就う

ん。若し又た我よ力を添へ。幾許此兵を貸し與へ。首尾能羅馬を討

たじめば。吾も亦一生涯窩爾西國に身を任せ。力を絞りて思ふ報
あん。オ、さふじや

トよろしく在て覆面をかづく。あれを合圖よ道具まはる
埃肌士館の場

本郷盛廣々たる館よし。遙か向ふの一室よは數多の燈火
を見せ音楽此聲聞ゆ。爰よ哥略拉那覆面をかづき花道より
出て来る

(哥略拉那) 搦と云ひ飾と云ひ。ア立派な内ではあるわい

ト云ながら奥此方を眺め

ナ。奥よ酒宴關なり。ア盛なる所の騒ぐれよ引かへ我身を
見れば。破れ衣も破れ履。客ども見へぬこの有様

トよろしくある。この趣へ一人の僕下手より出て來

○ろれへ入りしは何者だ。宴會へ招うれ若客人か。見れば汚ら

しいそのなりで。何用あつて参りしぞ

ト哥略拉那少し耻入たる面色よて會釋をなし

(哥略拉那) 某の哥略拉那と申すもの。今夜の客よのあらずして少
々あ、此係主人よ

○ナ。係主人よ用がある。茲の係主人は我國の係大將。そち等と
嘲をなさるよふな。係人柄どの違ふわい

爰へまた一人の僕下手より出て來る

□。コレこの見慣れぬ。奴は何れより來たものだ。面を隠くして
うろづく。胡乱な奴も進ひない。温和も行けはるれでよし。愚圖
くすれば敲き出をぞ

(哥略拉那) 今ま行きまそが。たつた一目御主人に

○ならぬ。コリヤ行けと云へ。早く行き居らぬ

(哥略拉那) 貸よ面倒な人達だ

□ あやり中々しぶとい奴。口で聞ゆぬと敲き出そぞ

愛へまた一人の僕下手より出て来る

△ こやつは一体何者で御坐る

○ 實も奇妙な奴で御坐る。拙者いかよふ申しても。は主人様に會せく。と云ひ張て。へさばり付て行きませぬとい

△ ヤイ。うぬはこゝに何用ゐるのだ。今晚は大勢の客人なれば邪間をなさずよ出て、行け

(哥略拉那) 何よとお邪間は致さぬ故。暫時ゑゝに立たせて被下

△ エ、まぶとい奴。一体マア汝の何者だ

(哥略拉那) 某は貴族で御坐る

△ エ、ナニ貴族だ。このさまでマア貴紳などゝ。さやつ氣でも違て居るゝ

(哥略拉那) いや氣も違わぬ眞實の貴族で御坐る

(二同)

△ いやナニ乞食貴族殿。こゝはお前方の居らるゝ處でない程ど

にどあぞそこらの片隅も。踞て居てもらいたい。ゴソどなたか

ノ。奇妙奇体な珍客が参られたと。御主人様へ申上被下

□ フム、これを今夜此一興とならん。ドレ拙者申上ゆて來ませ

△ シテ乞食貴族様の住家は。何處で御坐るぞ

(哥略拉那) 某が住家の天が下

(二人) ナニ天が下とぞ

(哥略拉那) いゝも天が下の一本立。主あし此獨身者で御坐る

△ ハ、ハ、ハ、あやつ奇体なよふな。面白いよふな。何とぞ角とを別らぬ。乞食貴族様でゝあるとい

上、手より出で来る。皆々よる。若く禮をなせ。

 (瑛脚素士) の乞食貴族はいつれも居る。

 (瑛脚素士) されも居りませ。

 (瑛脚素士) の乞食貴族とやら。汝のいつれより

 何用め。汝は幾時か此に居る。

 汝の答へ何と申と

 ト云ふ。母略擄那言ひ兼ねる。

 なぜ申さぬ。汝の名は何と申す。

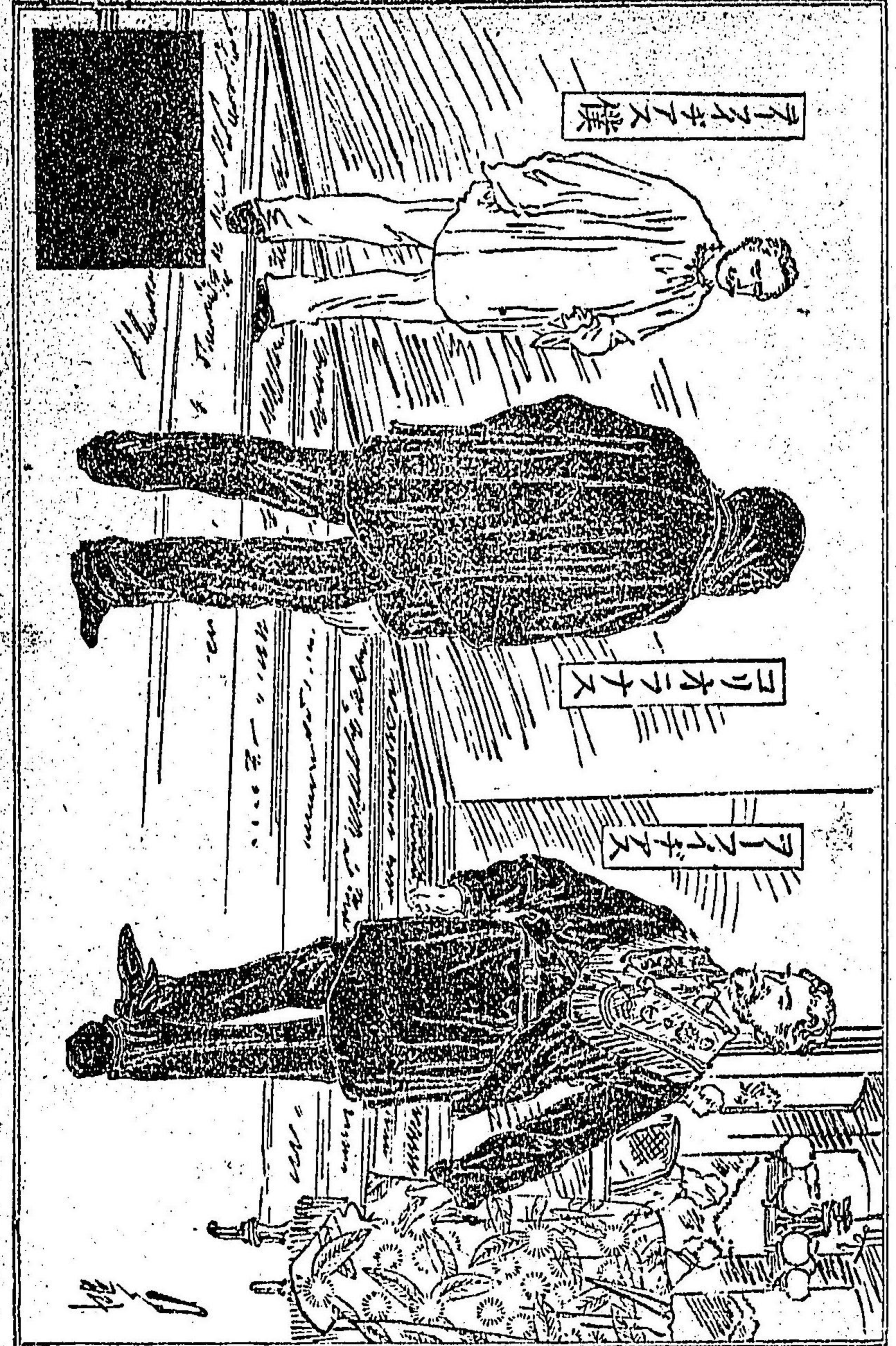
 略擄那言ひぬ。覆面を脱ぎ。

 (略擄那) 遂に素士腹を刺し。其を懐に納げ。

 某の面体も覺わ

 らぬ。

 (素士) 此の時三人の僕下手へはいる。



(哥魯拉那) 某此名ハ窩爾西の人ヲ以テ御宇ニ御坐ル
 (埃非丟士) 乃ハ汝の面体ヲ最ニ勇け人ヲ制する相貌也。汝
 の姓名聞かまほし。其の事ハ我ニ告げ給ふらん。貴殿の事
 (哥魯拉那) 某の名を聞きければさぞ驚き給ふらん。貴殿の事
 御合点なされずや。其の事ハ我ニ告げ給ふらん。貴殿の事
 (埃非丟士) いかゞ。其の名は何んぞ。其の事ハ我ニ告げ給ふらん。貴殿の事
 (哥魯拉那) 然らば明も申らん。其事ハ貴殿の事ならず窩爾西
 全國の人民に一方ならぬ損害をかけた。故亞斯馬爾士亞
 (埃非丟士) 其の事ハ我ニ告げ給ふらん。其の事ハ我ニ告げ給ふらん。貴殿の事
 (哥魯拉那) 其の事ハ我ニ告げ給ふらん。其の事ハ我ニ告げ給ふらん。貴殿の事
 埃非丟士其故。因みて諱を尋略控那。其の事ハ我ニ告げ給ふらん。貴殿の事
 (埃非丟士) 其の事ハ我ニ告げ給ふらん。其の事ハ我ニ告げ給ふらん。貴殿の事
 (哥魯拉那) 其の事ハ我ニ告げ給ふらん。其の事ハ我ニ告げ給ふらん。貴殿の事

ト一寸と思入れ在て
 コレ達爾拉士埃腓士殿。無か貴殿の某をお惡しみあらん去
 ながら。今某が云ふことを好く聞き被下。某當國を騒がせて歸
 りしより。羅馬此民長拙者を惡むおと甚はだしく。物も付け折に
 のけ。平民原も諷言し。某の功勞に酬ひをせず。貴族の卑屈を幸と
 して。遂も吾を國外へ追放の刑も処せし故。止むなく貴殿を尋ね
 し仕義。斯く某が鐵面にも舊敵窩爾西此境も踏込み利さへ水火
 容れざる貴殿の内へ。無衛赤手もて來りしは。言ふまでもなく刃
 の霜と消ゆるの覺悟の上なれども。某羅馬の平民も目覺ましき
 復讐を致度。依り助力を貴殿も願はん爲となり。コレ埃腓士殿
 貴殿若し我を怨み。復讐せんと思ひ給ひ。明日とも云ひ。今こ
 ろで。思ふ存分なさるべし若き。又たこれ迄此おどは。漢も喰は老
 吾も力を添へ給へ。吾一生の勇を絞り。腐れ果てたる本國を。只

だ一袂に蹂躪り。快よく復讐なし申さん。又本領を迷かたる上
 の身を窩爾西の國に任せ。捕となり。戈となりて。受りたる恩に報
 酬せべし。サア埃腓士殿。有無の返答も聞せ被下
 (埃腓士) 獵夫とら尙ほ親鳥を憫れむ。況んや堂々たる丈夫も於
 てをや。仮令いなる怨恨あるも。せよ眼前本國を放逐せられ
 漂遊流轉の身とありし。世も情あき落人を何とて討どり申さん
 や。これまで貴殿と某が。劍を交へし。の數は。鐵治此床より尙何
 多し。これ二人もて。鍛へたる。劍を一所も取り直せば
 (哥略拉那) 羅馬如き。取るに足らず
 (埃腓士) ア、心地よき
 ト喜ぶおとよろしくある
 イヤナニ馬爾士亞殿。先頃より羅馬進撃の同意を致し。十二才の
 少年より。七十の老翁も至るまで。皆な兵役も當らし。近きが内

(斐尼紐士) イヤ あれば、く、お兩方。暫くも目より、りませなんだ
 (西齊紐士) イヤ モフ 哥魯拉那在國の節は、色々騒動が起り吾
 々ども、大心配をいたしました。今日では、これ儘も、天下大平滅
 安心致し、坐る。あの哥魯拉那と云ふ奴の貴殿等、始め貴族方の
 爲め、力よなるか、益よなるか、存じませぬ。我々平民共、
 兎の毛に置く露、何とも、利益よ、のあらぬ奴。うの証據、おは、彼が國
 を立出で、と、今の様、國は立派に立行まそ
 (斐尼紐士) ナルホド、涉尤も至極去りながら、哥魯拉那殿の氣質を
 時の風、お應用と、るとき、随分利益、涉坐るわい
 (西齊紐士) ソレハ、さふと、彼は、これ頃、いづれ、居りますぞ
 (斐尼紐士) 某も、知り度、存じ居れど、まだ行衛は、知れ不申。哥魯拉
 那殿の實家へも、更に一度、のたより、もなきと、の、おと、併、遠、ら
 ぬ、内、分、り、る、で、御、坐、ろ、ふ

あ、の時、市民、三、四、人、連、よ、て、下、手、よ、り、出、で、來、る
 □ヘエ 夫れ、よ、涉、出、さ、さ、れ、ま、す。涉、而、方、の、民、長、様。先、頃、は、我、々、共、の
 難儀を、お、救、ひ、被、下。誠、に、難、有、ふ、存、じ、ま、す。神、々、様、を、さ、ぞ、あ、な、た、方
 を、お、獲、め、さ、さ、る、で、御、坐、り、ま、せ、ふ
 (西齊紐士) 市人達も、さ、す、う、れ、ま、ら、ふ
 (不慮多) 無安心、ま、た、で、ら、ふ、ソ、フ
 ○ソレハ、モ、フ。命、が、百、年、を、延、ぶ、よ、ふ、な。心、地、が、致、し、ま、そ
 △お、れ、も、皆、な、お、兩、方、の、お、ん、情、け
 (一、同) 難、有、存、じ、ま、す
 (西齊紐士) イヤ、う、の、禮、よ、い、及、ば、ぬ、く。吾、々、二、人、の、そ、ち、達、に、撰、舉
 せ、ら、れ。羅馬、平、民、の、猶、ど、と、な、り、居、る、も、此、な、れ、ば
 (不慮多) 平民を、傷、ふ、奴、を、賤、く、る、の、これ、皆、を、吾、々、が、擔、へ、る、義、務、何
 ぶ、も、ろ、の、よ、ふ、難、有、が、る、よ、い、及、ば、ぬ、う、れ、よ、り、早、く、家、に、歸、り、職

を奨励するが感じん。サア、早く歸るがよいぞや

ト親切を説ふと言ふところよろしく在る

△いつもながら親切なるあん詞

(二回)難在ふ存じませ

□これ皆の衆、仰み従ひ早く歸る。働ふていならう

(二回)うれがよい

□左様ならばお兩方さま

○お先へ失禮致します

ト一同よろしく在て花道へいる

(西齊紐士)ア、今此平民共も先頃諸肌ぬいて狂ひ廻た時より

どれ程安樂うも知れませぬとい

(不慮多)此此哥畧拉那の。戦争と云ふときよハ随分役に立つ

奴なれども。何分傲慢な上は無禮を重ね。又たろの上よ我慾と來

と居るゐら。其下よ居るものは。どふまで。堪られぬものてい
涉坐らぬわい

(西齊紐士)うして平民に助力を仰がずし。我國の全權を握り。政

柄を執るふと企てるゐら。いま。敷思はるゝてや。なんと斐尼

紐士殿。さよふては涉坐らぬ

(斐尼紐士)イヤ某の了簡はるれと反對

(兩人) ナニメリヤ 貴殿より

(斐尼紐士)いうよも某の。哥畧拉那殿が。執政官とあらるゝを賛成

致し居ります。一体國の干城利さへ。勳功高き豪傑を外國に追放

して喜ぶなど。貴殿方此精神。某一向に合點が参らぬ

(西齊紐士)エ、又たして。我田引水のおどばあり。貴殿方よ

の利益よなるう存せぬが。の傲慢無遜の哥畧拉那を。執政官を

して見られ。うれるそ鬼よ金棒虎よ羽。氣随氣儘よ暴れ廻り。吾

々人民の一日も立たぬ中。皆な喰ひ殺さるゝて坐るふ
(不慮多)の様に平民共を。苦たるから終まは。赤裸あはだかにて異國にたづ行
復よのねばならぬよふなり行きのだ。へん。おれから後の貴族衆
も。これを手本せとるがよい

あの時一人の副民長花道より喘あせぎく出て来る

(副民長)民長方一大事おそ起りて候

(西齊紐士)そなたの副民長シア一大事どの何事なるや。心もどな

し早や告められよ

(副民長)サレバて御坐る。先頃一人の怪しき者を捕りをさへ。獄がくよ

繋つなぎて種々詮議致せし処。窩爾西の軍勢いくさ二手よ別れ。己おれも我領内

よ入込たる由。確かよ白狀致て候。察する処。あの者は。窩爾西國の

問者たねで御坐らん

(兩人)ナント

(麥尼紐士)スリヤスリヤ瓊たま肌はだ士しまたと吾國よ押寄せしどな。彼れ哥あ魯ろ
拉那殿の始末を聞き。雨あめよあふたる蝸牛かたむし比ひ如ごとく。再び角つうを現あらはせ
しり。ア、今ある惜あはしき哥あ魯ろ拉那殿。武勇勝れし彼の人。依然い吾
國くによ居られなば。かゝる愛あいなきもの。今は何國なんよ居らるゝや
ら。殿もさだかならざる仕し宜よろ。ア、うくなるも誰たれた業わざ

(西齊紐士)またしても。哥あ魯ろ拉那らなどか。馬爾士亞まにしあどう云いはるれ
ど。仮令たと彼奴やつが居ればとて。敵たれ都合とがまいときまひ。遠慮えんりょなく攻
て参まりませ。殊ことよみ此度窩爾西勢いくさが来りしどの。良よか偽いつはりりまだ分
らぬのよ今からびくづくどの。餘あまり腰こし抜け。良よ實じつ来たらば。ア
(兩人)いかいし召よさるぞ。ハ、ハ、ハ、

ト嘲あざわり笑わふるとよろしくある。此時一人の使者花道より出
て来る

(使者)麥尼紐士まにしうし始はたぬ兩方りうども。至急しゆじゆ議事院ぎじいんへおん越こし被下度

し
 (斐尼紐士) フム、ろれを虜此云ひしこと又付ていあらふ
 (使者) 仰の通り。虜とやらが申立てしことに付て。職事官此方々様
 が何う御相談なさるゝ由に候へ共。なほく外よどえらい報
 知が有りしとのる故。大方うのことを御相談なさるので御坐
 りませふ
 (斐尼紐士) フム、ろのまゝ何事のしらせなるぞ
 (使者) 其儀は私を儘あよ承知致しませぬぞ。人々の噂を聞きま
 すれば。先頃追放せられたる。哥畧拉那は。窩爾西の大將埃腓士
 と力を合せ。最早この羅馬よ攻た入りしとの。さどては坐りま
 と

(二回)

ト顔を見合せる

(西齊紐士) これいゝるよも最とらしい報知
 (不慮多) 昔しこれが誠なら。卑怯未練な者共は。哥畧拉那がこの羅
 馬に居ればよいと思ふて御坐るよ
 (斐尼紐士) イヤ中々以て哥畧拉那と埃腓士とは一致の出来る
 よふな中でのに坐らぬ
 あ此所へ古美紐士花道より出て来る
 (古美紐士) アア。民長方は。大變なことを出来されしぞ
 (斐尼紐士) シアそれは何事では坐る。若しや哥畧拉那殿と埃腓
 士と一致して。吾國よ攻た寄する儀では坐らぬ
 (古美紐士) いかよも左様。これまで埃腓士と哥畧拉那殿といふ
 と。猿と此間柄なりしよ。どあの場合でなりしもの。埃腓士は
 哥畧拉那殿といふ親密なる交を結び。今度我羅馬よ復讐せんと
 哥畧拉那殿を一方の大將に撰び。二手よ分かれて押し出だし。己

に吾國を攻め入りしとのこと。哥魯拉那殿と云ひ。埃那士と云ひ。向れ劣らぬ勇將なれば。彼等に打ち勝たんとしと思束なし。ア、吾羅馬強國を。一、千金を釣るが如き危き境又沈れしを。あれ皆な民長方の仕業なり。されど今より悔ゆると陸方なし。只だその上の救助の策を互に相談仕らん。

(斐尼紐士)の事が前以て知れ居らば。仮令幾百万人攻め來るともまた防禦の策もある。何分不意の急變も。最早如何とも致し難し。只だ哥魯拉那殿又慈悲を願ふの外。他は施す策を御坐るまい。

(古美紐士)は最もなる貴殿の仰。某を一應にかま思ひまらども。困たり此は願ふ行く人。お待召されよ。

ト少し考りける。

エ、兩民長の吐らひて。よもや願ふ參られまじ。ソレトモ平民共

が参らふか。イヤ。狼の前の羊と同前。危い。ソレトモ。人のイヤ。談判が出来まい。ソレトモ。あれこれもいぬ。ア、誰を遣たら宜らふ。困たぬと出来たものだ。

(西齊紐士)貴殿方は。何う我々が。この大事を起したよふ。仰せられま。が。露程も我々。は關係なきこと。皆な各方の不行届より起りしこと。で。坐るわい。

(斐尼紐士)ハ、ア。あ。奇怪なる。あ。と云はる。そのうな。失禮ながら我々は。常。哥魯拉那殿を愛し。聊。と。追放など。言ひ出せしことなし。それ。引。へ。貴殿方は。哥魯拉那殿。此功を。嫉。種々。機。巧。みて。平民原を。煽。勵。し。廣。き。世界に。二人。と。あ。き。果。斷。勇。敢。なる。長將を。反。逆。人。と。云。ひ。な。して。立。たる。手。柄。又。剛。も。せ。ず。不。人。情。おも。殘。酷。も。國。外。追。放。に。処。する。と。い。ふ。れ。が。誠。此。人。面。獸。心。それ。何。ぞ。や。今。ど。なり。自。分。の。罪。を。人。と。塗。り。知。ら。ぬ。顔。して。逃。れ。ん。と。

の某誠も片腹いたし。民長方よも言ひ解くことの出來まを
まい

(兩人) ヲ、ハ、ハ、ハ、メリヤ なんと

(古美紐士) コレ 各方今も至て争ふも。死見此年を繰ると同然。無益
のことでのい移坐らぬ。さには云へ今もを羅馬府が軍を以
て攻め來られ。此羅馬府も入られなは難を受くる人達の泣面
さげてをめぐると慈悲を願ひも行くお相違は坐らぬ

この處へ三人の市民下手より出て來る

(斐尼紐士) コレ 市人のづれも早や知りしならんが。今度哥羅
拉那殿。大軍を以て吾羅馬も攻め來り。退放したる人々も。難を復
さんとせらる。由。これと云ふも。さる邊。後先見すもなせし故
一同。ア。ろ。も。邊は今度のこととをどふ考へ居るぞ
○私共も。多の話をき。ま。して。吃驚仰天致しました。が。フ。何と

と致方が坐りませぬ

(古美紐士) イヤ。ナ。ハ。斐尼紐士殿。焦眉此場合おく安閑として居
られませぬ。早く職事院も出頭しよふてい移坐らぬ

(斐尼紐士) 然らば直様出頭致さん

ト二人上手へはいる

(西齊紐士) コレ 皆の衆。さふ落膽する。さどのない。またこの羅馬の
町へ來たと云ふてをなし。また必定。負けると極たことをないの
だら。皆な内へ歸へりて。枕を高く寝て居るがよいわい
△ イヤ。モ。フ。神々様。私共をお助りなされて被下ますれば。ナ
るんなも恐るゝ。さとは坐りませぬ。オイ。皆の衆。早く歸ふ
てはない。さよふなれば。免被下ませ
ト皆々花道へはいる

(不慮多) さふも今度のこと。拙者等も取て余まり面白くない

とて坐るナア

(西齊紐士) ナニ心配するは及びませぬ。ナン、噂ほどの

とてと坐るまい。口

(不慮多) 拙者はどふも。氣よるゝのてなりませぬ。ア、拙者が

身代を残らず出しも。これ報知を虚言を買ひたいものじや

ア

ト空を眺た

ヤア思はず隙取つたドレ議事院へ

(西齊紐士) 参りませふかナア

ト兩人よろしく在て幕

○六幕目

羅馬府議事院の場

舞臺總て會議場此休。あゝ、麥尼紐士。古美紐士。西齊紐士。不

慮多外よ三人の議事官よきよふに居列び居る

(麥尼紐士) イヤナニ古美紐士殿。某のいかよふお勤めあるとも。決

して敵陣へ参らぬ所存で御坐る。あの哥魯拉那殿とは最も親密

な交際ひ召されし貴殿でとら。空しくお歸り召されたての御坐

らぬ。それよ中々某等が五人や十人行きたとよも聞入れる

ことばは坐るまい。哥魯拉那殿在國の時の時よ。某を父上父よ

と呼び居られしと。今となつては役も立まい。只だ此上は民

長始め。哥魯拉那殿を放逐せし人々。敵陣より一里を隔りし所

よ眺き。頭を地上に摺り付けて。慈悲を願ふより外は驚の御坐る

まい

(古美紐士) ア、某が彼の陣所に赴きて。哥魯拉那殿に面會致せ

時。哥魯拉那殿の平氣な顔よ。更に某を知らざるものゝ如く親

しき詞は扱置て。見向もせられぬ仕合せ故。少しも取り付く所な

く阿容くど立歸り上殘念きま。かゝる耻辱を受くるもの元
 のも云へば兩民長。一體アアどふもたら宜あらふか
 (斐尼紐士) ヲア 貴殿此名を呼ばれざりしや
 (古美紐士) 只だ某が哥畧於利戰爭の話となせしとき一度と。羅馬
 を焼き拂らふべしと云われしとき一度。都合二度吾名を呼ばれ
 しばかり其の後は哥畧拉那殿と申せども更も答へず。馬爾士亞
 殿と叫べども更も振り向かず。觀者の如く。又た木偶の如く一言
 半句も返答なき故。如何とも詮方尽き。某殆んど困却致し御坐る
 (斐尼紐士) スリヤの羅馬を焼き拂ふとな。アハア 民長方始と平
 民共はよい仕事を出来したものだ。而れ哥畧拉那の放逐は無二
 の英斷で在た。無後の世の人々が褒めることとて御坐るふ
 (古美紐士) また不意討とい武將の取る處ならん。某それとなく
 隠しせし。哥畧拉那殿の云ひるゝもの。その自分等が退放した

る人に向ひ。慈悲を乞ふ。卑怯な詞だ。只だ一言よはぬ付ら
 れて御坐る
 (斐尼紐士) 誠お困たものだ。アア 何の貴殿や某のあとを言はれて
 御坐るか
 (古美紐士) 別な名れと云ふ。あともなみりしが。只だ某が朋友と對
 しての尊厳と云ひしとき。しぶくながら答へて云ひるゝよふ
 我の積み重りたる。埃塵は中より。儼みの寶玉を拾ひ取る。能
 はず。假令その中より二三の寶玉あるにせよ。これを失ふること
 を恐れて。而れ毒身ある埃塵を焼き拂ふと能はざる。いゝるよ
 も馬鹿氣なることならずや。何の意味の在りまふなるを云
 ひれて御坐る
 (斐尼紐士) アハア。二三の寶玉ありと申されし。その二三の
 寶玉は。即ち貴殿や拙者此。又た毒氣ある埃塵とは。民長

始り平良其を指されしなるべし。その美質ある寶玉が。され
埃塵の在る處たよ。空しく燒き捨せらるゝとは。實に残念至極で
御坐らぬ。

(西齊紐士) コレも前方。どの危急の場合に於て。無益の愚痴をまほ
されんより。早に相談を種に召されぬ。

(不慮多) さよふ。拙者どもの考よてい。今より軍勢を築めんよ
り。麥尼紐士殿が敵陣に赴われ。可然和睦を願ひる。方。余程上策
もど存じませ。

(麥尼紐士) イヤ それい某の力も及ばぬこと

(西齊紐士) イヤ どの在てもある事

(不慮多) 貴殿よ願申し度し

(古美紐士) 先方の承知ば見と角も。貴殿此力も叶ふ丈け。國の爲た
身此爲よ。何卒御尽力被下るべし

(麥尼紐士) スリヤ どのあつてを

(三人) どふあつてを願申さん

(麥尼紐士) ろふ仰じやれば。是非も及ばず。某敵陣へ参るで御坐る
ふ去りながら。古美紐士殿でそら空しと歸られし程あれば。口不

調法ある某が。假令舊館を説くどて。當抵その甲斐は御坐るま
い。されば功なくして空しく歸るとも。決して怨を被下るあ

(古美紐士) その御心配は御無用。吾とても空しく歸りしこと
あれば

(西齊紐士) 假令充分の成功なく。空手でお歸り召さるゝとも。貴殿
の厚意争である怨を。申さんや

(不慮多) 吾々のみか人民一同より。懇なる謝詞を述ぶるで御坐る
ふ

(麥尼紐士) 然らば直さま出立致さん。假令古美紐士殿の如く。甚は

だとき冷遇を受るとも善願の届くまでは飽くまで根強く耐
忍じて。一步も退るぬ覺悟で御坐る。

(不慮多) イヤ、貴殿はあの哥畧拉那よ。父の如く敬まられて居
らるれば。必ならず厚き待遇を受給ふよ相違御坐らぬ

(麥尼紐士) さらば參らん各方
ト立ち上る

どの云へどふも

(一同) エ、

(麥尼紐士) 吾力の及ばん限り

(古美紐士) 國此爲め又た家の爲め

(麥尼紐士) 陀度尽力仕らん。何れ兎をあれ

(西齊士) 首尾よき報道

(不慮多) 首を伸ばして

(一同) 相待申を

トよろしく思入あつて。麥尼紐士花道へ歸る。一同見送りて

(古美紐士) イヤ、仮令麥尼紐士殿が行りるとも。必定無功で御坐
ろふ

(兩民長) その又たなせに

(古美紐士) さればさ、哥畧拉那殿の顔を見るよ。眼は羅馬を焼くが

如く。口の羅馬人を喰ふが如き。その恐ろしさあと怒れる獅子を

かくやと思ふ計り。中々側へも寄り付くれぬ。その有様。刺さへ。貴

殿方が行かれし苛酷なる取扱。哥畧拉那殿の胸一ぱい。塞が

りて。羅馬を助くる感情を抑制する番兵となり居れば。某や麥尼

紐士殿が行きたとて。中々聞き届けらるることでは御坐らぬ。故

に哥畧拉那殿の心を動かし。羅馬を助くる此念を起さまむるも

の。只だ哥畧拉那殿の母人内室及び子息もあるのみ。聞けばさ

の人々も。國の爲め自ら敵陣へ行かん。決心なし居らるゝ由
されど一日も早くこの人々を。和睦の事を依頼して、敵陣へ赴
きて貰らふが上策で、御坐らぬ。各方の御所存如何で御坐る
(西齊紐士) ソレ、いかもよき所へお氣が付けられ。仮令山を
裂きの勇ある哥畧拉那も。母や妻子に泣き付けられて。心挫け氣
力撓。後には和睦を免るす。相違御坐らぬ
(不慮多) さよふ、今日も麥尼紐士殿が。空しく歸られしその
時に

(西齊紐士) 古美紐士殿の詞の通り

(不慮多) 彼の人々へ頼むで御坐ろふ

ト皆々よろしく在る。おにて道具まわる

羅馬此近郊窩爾西陳營の場

本舞臺門前の休よて。正面お大なる陣門を見せる。こゝも麥

尼紐士花道より出て來り。門前に止まりてあちあち見廻り

守門内より三人の番兵鎧を携へて出て來り

○ コリヤ、其方はいづれへ參るものた

(麥尼紐士) 察する處貴殿方の。この陣營を守らるゝお方ならん。某

ことの子細あつて。大將哥畧拉那殿も面會致度。是まで參りしも

此なれば。何卒お通し被下るべし

○ シア、いづれより來りしものじや

(麥尼紐士) 羅馬府より參りまもので御坐る

○ 羅馬府とあれは通す。とは相成らぬ。我大將哥畧拉那殿の。羅

馬府よりいかなること。を申し來るも。中々お聞取なされはせぬ

お目にかゝると無益のことじや。早くことを立去れよ

□ 其方が我大將のお目より。對談致す。その中より汝が住所

の羅馬府の。烈しき火焰となるならん。無益の事をなさんより

一足でも早く立歸り。妻子と別の盃さかづきなして死田の用意を致そがよ
あらん

(麥尼紐士)その御心添たす添たすけなして去なぐ。某は大將の舊友ふるともよて麥
尼紐士と申そもの。決して胡散こさんなものも候はねば。曲まがりて入門を
お許し被下

△仮令其方の名何なもせよ。又た大將の舊友ふるともよもせよ。敵の奴やつ
原はらと聞く上。一足たりともこの内へ。踏ふみ込まこるゑと

(一同)叶はぬく

(麥尼紐士)さらば一層委まかしき。話をお聞きひせ申さん。某と大將との
間柄まがたがらの殆んど骨肉こつにくの親子と一般。常に大將よ。某を。父よ。父よと
馴なれ慕たがひれ。某もまた親の如ごとく。始終大將を補翼おぎなせり。それのみな
ら。某は虚言うそを吐はくこと。大嫌きらひ。一寸のあど。一寸と云ひ。一
尺のあど。一尺と云ひ。違ちがひしこと。一言ひとことと。唇くちばしより外そとへ漏もらせ

しことなま。されど大將の軍功いくさの。一寸のものは五寸と褒ほた立て
一尺のもの。五尺と言ひ。觸ふらし。常つねに大將比身ひしんの上を。固かたく守まもり
し某なれば。敵の敵たてでも味方同然あつちやうぜん。決して悪わるき事ことの致いたさぬ故ゆゑ。何卒
あの門かども通とほじ被下

○ エ、ツベコツベコと口賢くちかき奴やつ。其方何程なんぢやう陳述ちんじゆつするどをこゝ通とほるゑ
とは罷たがりならぬ

(一同)立歸れく

(麥尼紐士)さふさふがやがやと申され。某が名なの麥尼紐士まににすとて。大將
哥略拉那殿ががくらなまだ羅馬ろまに居られ。志節しせつ。平民へいみんと闘争とうそうせられたるの折
よ。常つねに大將の味方あつちやうとなりたる。もので御坐る
エ、しぶとい。老爺おやぢ奴やつ。今いまの方が云ふ如ごとく。如何程なんぢやう大將の爲め
お尽力けんりきまたよもせよ。うは。大將が羅馬ろまに居られし。ときの話はなし。敵同
士しとなりたる。今日けふにては。時代じだい違ちがひの紙幣しへい同機どうき。少しと役やくよ立たた